



ヴァージニ
テイ



ルシア

第1章

わたしの背中には、月型の大きな赤い痣がある。

小さな頃、母親に折檻された傷痕が残ってしまったものらしい。といっても、わたしにその記憶はほとんどないので——保護施設に預けられている間も、何故自分が両親と離れて暮らさなければならないのか、まるで理解できてはいなかった。やがてカウンセリングなどを受けて立ち直った母は、父とともにわたしと妹を迎えにきてくれたけど、むしろそれからのほうが家族の関係は殺伐としていたような気がする。

確かに母は、妹やわたしに手を出して怪我をさせたり火傷をさせたりすることはなくなった。でもそのかわり——長女だったわたしは、目に見えない形で家族内のいじめの標的のようなものとなり、犠牲の生贄とされたのだった。

わたしは自分の家族が全員、大嫌いだ。

妹の麻亜子は母だけではなく、誰に対しても顔色を伺うようにびくびくしているし、また何かにつけて母と同調しては、わたしの立場を劣勢へと追いやった。父は極めて頼りない、気弱な人間で、家庭内に果たしているのかいないのかわからない、屁のような存在の男だった。

そして母——はっきり言って、わたしにとっては幼い頃に折檻されたことなどはどうでもよく、それ以外の理由によって彼女のことを母親だとは今も認識していない。彼女は安月給のタクシードライバーである父のことを何かにつけてはさんざんこき下ろし、自分がいかに苦勞しているかということを、わたしと麻亜子に毎日のように語って聞かせた。

「あんたたちにわかる？毎日水産加工場で魚くさい匂いになって、一生懸命働いてる母さんのこの気持ち。バスに揺られて通勤するだけでも一時間かかるのよ。もう帰ってくる頃にはくたくた。その上父さんはごはん支度なんて何もしないでしょ？今じゃあ、パートで働いてる母さんのほうが、あんな奴より高給取りなのにね」

——このくらいであればまだ可愛いほうで、母はその他にも職場にどんな嫌な人間がいるか、さんざん悪口とともに愚痴りまくり、お陰でわたしはともかくとしても妹の麻亜子は、〈外の汚い世界〉というものに対して過剰なまでに敏感に反応する神経質な子供になってしまった。

それでも母は今でもたぶん、麻亜子が自殺したのは学校内で受けていたいじめが原因で、自分のせいではないと思っているのだろう。いや、もしかしたら無理矢理にでもそうと思えば、自我というものが崩壊するおそれがあると、無意識のうちにも自分を守っているのかもしれない。

麻亜子が十四歳という若さで自殺した時、父と母は学校側や加害者の生徒やその両親を訴えて、裁判沙汰にした。そして数年後に示談が成立したわけだったが——なんのことはない。ただ単に彼らは金の力の前に屈伏しただけなのだ。表向きの示談金の他に、両親がどのくらいの金額を相手側から絞り取ったのかは知らないけれど、よくもまあ娘の命を金と引き換えにできたものだ、と、ほとほと感心してしまう。

そんな家族だったから、わたしは高校を卒業するのと同時に家をでた。四歳の頃から家事手伝いをさせられて、小学生の時も中学生の時も、友達と外で遊ぶ時間さえなく、小間使いのようにわたしは家族のためにせっせと働いてきた。その上、母は何かある度ごとになんでもわたしのせ

いにしたし、妹はそのことに同調し、父はいつも見て見ぬふりをした——それでも、麻亜子が死んでしまうまでは、わたしも自分の家族に少しは希望というものを持っていた。いつか、もしかしたら将来、孫を抱いた両親や妹と一緒に写真を撮り、昔は大変だったけど、生きてさえいれば幸せってあるんだね……そんなふうに笑いあえる日がくるかもしれないと信じていた。でももうそんな日は永遠にやってこない。

何故って、すべてはお金とともに虚しい数値に置きかえられて、彼らは麻亜子の死んだ本当の意味を、親として考えるのを放棄してしまっていたから……。

麻亜子はきっと、気の弱い父の血をより濃く受け継いでしまったのだろう。わたしは妹とは違い、打たれ強くてタフな上、むしろ打たれれば打たれるほどファイトがわいてくるというタイプの人間だった。だから妹と同じように母の職場の愚痴話や、世の中にたくさんいる汚らわしくて醜い人間の営む社会生活について色々聞かされても、「世の中なんてしょせんそんなもの」と、かなりのところ開き直ってクールに母の話を聞いていられた。

でも麻亜子は——四歳の頃から可愛がっている熊のぬいぐるみのオラフちゃんに、中学生になってからでさえ話しかけているような、そんな純粋な娘だったのだ。もちろん、彼女が活着いる時、わたしだって妹の動作のとろさや頭の回転の鈍さ、舌足らずな話し方、人の顔色を窺うような怯えた目つきに何度もイライラさせられたし、実際のところ、彼女が自分の血の繋がった妹でさえなかったら、麻亜子のようなタイプの子はいじめられても仕方がないとさえ思ったかもしれない。

虫の名前で呼ばれる（彼女の仇名はカマキリだった）、掃除当番を押しつけられる、好きでもない男の子にラブレターを書くよう強要される……それだって、受けた当人にしてみれば相当ひどいことではある。でもそのくらいなら、わたしは姉としてもまだ許せただろう。でも妹の受けたいじめというのはもっと凄惨なもので——彼女は丸裸にされた上、その写真を同級生に携帯でとられ、その写真を脅しのネタとして使われていたのだった。そして売春を強要されては、稼いだお金をクラスのリーダー格の女の子に全額渡していたのである。

妹が亡霊のように写っている、彼女の中学時代の卒業アルバムを開いて見るたびに——わたしはいつも思ったものだった。狐のようにつり上がった目つきのその女に、妹と同じ思いを味わわせてやりたいと。他の見て見ぬふりをしていたであろう連中に対しても、なんらかの形で報復してやりたいと。

でもそんなどす黒い感情に負けそうな時はいつも、妹の残した熊のオラフちゃんのことをぎゅっと抱きしめ、彼女がよくそうしていた時と同じように、わたしは彼に話しかける。

小さな時、麻亜子に何故熊のぬいぐるみにオラフと名づけたのかと、訊いたことがあったけど——彼女はきょとんとして、真ん丸な目をくりくりさせながら、こう言ったっけ。

「麻亜子にもよくわかんない。でも向こうが最初に、『ぼくの名前はオラフだよ』って、そう言ったの」

きっと麻亜子は今、＜彼＞の精神性が実際に存在しているような、そんな世界で暮らしているのだろう。なんの悩みも苦しみもない、汚れのない清らかな魂だけの存在する世界……そんなふ

うに時折、『森のくまさん』のような童話的世界を想像しては、わたしは姉として妹に何もしてやれなかった自分の腑甲斐なさをやるせない思いで後悔した。

地元の偏差値の低い公立高校を卒業すると、わたしは札幌の中心部に越してきて、叔父の経営する本屋さんで正社員として働くことになった。わたしは自分の家族だけでなく、自分の親族全員も大嫌いだったが——基本的に、父や母をそのままコピーしたような人間性の人ばかりであったので——父のふたつ上の兄である、友彦おじさんだけは別だった。

彼は苦学して、七人いた兄弟の中で唯一、大学まで進学した人で——小さな頃からずっとわたしは、友彦おじさんのような人がもし自分のお父さんだったらと、憧れ続けてきた。

背がひよろ長くて一見、実に頼りなさそうには見えるけど、眼鏡をかけた深い知性を感じさせる面長の顔はどこか気品に満ちており、思わず人が頭を下げずにはおれないような威厳があった……といっても、おじさんは若い頃から内気だったらしく、何故人が自分に敬意を払おうとするのか、まるで理解できないという純朴な人でもあったのだけれど。

そんなおじさんが経営する本屋さんは大通り公園のそばにあり、住まいのほうは石山通り沿いにあった。わたしは最初のうち、そこで従兄の和久と友彦おじさんの三人で暮らし、一年後に中島公園のそばにアパートを借りた。

わたしが家をでていこうとする時、おじさんはとても残念がったけど——職場でも家でも一緒というのは、わたしにはあまりにもつらすぎたのだ。おじさんは和久のお母さんを、十年も前に亡くしていて、今は六十五歳の、わたしと同じ年の息子がひとりいる、いわゆるやもめ男ではあったのだけれど——わたしは寝食をともにするうちに、このお人好しで優しい、自分よりも三十五歳も年上の男に、かなりのところ本気で恋してしまっていた。

和久は根の暗いボンクラな奴なので、そんなことには少しも気づかなかったみたいだけど——やはり人間は内面なのだ、精神性なのだ、男は顔じゃなく魂なのだ……友彦さんと和久を見比べれば見比べるほど、わたしはそんな思いを強くした。何故って、ふたりはとても顔立ちや性格が似ていたけれど、友彦さんのは円熟して磨きのかかった男のそれであり、和久のほうはまだまだ七転八倒、いい男になるのも平凡な男で終わるのも、これからの本人の努力と運命次第……年の差の分、それだけ大きな違いがあるように感じた。

ふたりはとても仲のよい親子でもあり、お人好しなのほほんとした性格まで似ているせいか、見かけは洋風なのに何故か縁側があるという和洋折衷型の不思議な斎藤家はすこぶる居心地がよかった。その上家賃も水道光熱費もただときた日には——それまで誰からも感謝などされずに奴隷のようにこき使われてきたわたしにとって、炊事・洗濯・掃除をすることなどは、そう大した労働ではなかったといってよい。その上、ふたりとも大層ありがたがってくれるし、どんな料理を作っても「うまい、うまい」としか言わないし、茶碗洗いや風呂の掃除、ゴミ捨てなどは自ら率先してやってくれるし——というわけで、最初の一年間、わたしは斎藤家で疑似家族的生活をこのまま一生送れたらどんなに幸せだろうとさえ思った。でもそのうち、友彦さんの寝起きのくしゃくしゃした髪や、寝呆けた顔、よだれのあとが白く残った頬、納豆には必ずネギを入れるところや風呂上がりにどくだみ茶を一杯やるところにときめきを感じるようになってからは——彼と同じ職場、同じ家でともに過ごす時間が濃密に胸に迫るようになり、苦しくてたまらなくな

ってしまったのだ。

そしてこのままでは家をでるか転職する以外に方法はないというくらいぎりぎりまで追い詰められたわたしは、友彦さん自身が設計したという斎藤家の、屋根裏部屋から出ていくことにしたのだった。

「馬鹿ねえ、あんた。そんなの簡単じゃない。そのネクラなボンクラ息子がいない時を見計らってさ、こっそりそのおじさんのベッドにでももぐりこんじゃえばいいのよ。『怖い夢を見て眠れなくなったの』とかなんとか、子供みたいな理由くつつければあとは万事すべてうまくいくって」

「友彦さんはそんな人じゃないもん」と、わたしは札幌市内に唯一ひとりだけいる友人、綾香に恋のお悩み相談をしている最中だった。

場所はススキノの『サヴォイ』という名のジャズバー。店内には年季の入ったサキソフォンやトランペット、ホルンなどが飾られていて、バックのナイトブルーの壁には、黒いマジックでところどころ、サインのようなものがしてある。時々、とても有名なジャズ奏者がやってきてプレイするということがあったけど、今日は素人が趣味でやっていますといった感じの人たちが、小さなステージでしみりセッションしているところだった。

「友彦さんはね、『怖い夢を見て眠れなくなった』なんて言ったら、本当にそのまま『おお、よしよし』っていう感じで、抱きしめながら一緒に寝てくれるような人よ。そしたら次の朝あたし、一体どうしたらいいの？あんまり惨めで耐えられなくて、やっぱり結局は家をでることになってたと思うわ」

「そおかしらねえ」

綾香は水色のカクテルのてっぺんにのっかった、さくらんぼを食べながら疑わしそうに言った。彼女はウェーブのかかった茶色い髪を一房人差し指に絡めとり、ベージュ色のワンピースの胸元でいじっている……もしわたしが男なら、思わず声をかけるか、その勇気がなくてもじっと見入ってしまうくらい、綾香は美人だった。いかにも田舎者の、センスなくて垢抜けない格好をしたわたしの隣にいるせいで、彼女の美はいやが上にも周囲の人間には高まって見えることだろう。

「そのおじさん、十年前に奥さん亡くして、今六十五歳なんですよ？だったらたぶん、あっちのほうはまだ十分いけるわよ。わたしの経験からいって、七十越えたおじいちゃんでもね、元気な人は元気なもの」

「綾香が言うと生々しくてなんかやだなあ」

お子さまのわたしはカルーアミルクをごくごく飲みほしながら、一見清楚な感じに見えて実はヤリマンという女友達のことを、複雑な目で数瞬の間見やった。

カウンターのスツールに腰かける彼女は、とてもわたしと同じ十九歳には見えない。その上すでにもう両手の指では数えきれないくらいの男と経験しちゃってるわけだから——何故綾香のような魔性の女が田舎娘のわたしと友達なのか、わたし自身、いつも不思議に感じてしまう。というか、綾香の過去自体、『そのとき少女に何が起こったか』的なものがあって、わたしは彼女に対してまかり間違っても道徳的な言葉なんて言えはしないのだ。

「大丈夫。実際のところ、本当は男の人って由架理みたいなタイプに弱いから。しっかり者で家事ができて、顔はお世辞にも美人とはいえなくても、処女で男とつきあった経験が一度もない... ..ここまできればマジで完璧よ。嫌味でも皮肉でもなく、褒めてんのだよ、これ」

「ありがとう」

落ち着いた、仄暗い照明の中で、わたしは微かに笑った。さっぱり系の美人というのは本当に得だと思う。何を言われてもそれが真実である以上、何故か不思議と腹が立つということがほとんどないから。

「でもやっぱりあたし、綾香みたいな美人に生まれたかったな。もしわたしが綾香みたいな美人だったら——明日にでも友彦さんの家に泊まって、夜這いをかけちゃうかもしれないけど、自分の顔を鏡で見たら、そんなの絶対無理なもの。それに、せっかくの叔父と姪の理想的な関係をぶち壊したくもないし」

「実際にはね、美人かブスかっていうのは、そう大した問題じゃないのよ」と、綾香は腰元のサッシュベルトに手をかけながら言った。この店にくる前に食べ放題の店で焼肉とデザートを食べまくったので、お腹が少しきつくなったのだろう。

「それより、最後にいきつくところはやっぱり内面性ね。美人で得だっていうのは、結局のところ表面的なことだもの。街を歩いてただけで声かけられるとか、合コンで他の女の子より人気があるとか、そんなくだらないこと、はっきり言ってどうでもいいわよ。どうせ網に引っ掛かってくるのはカスみたいな男ばかりだし.....あたしは逆に、由架理が羨ましいけどな。まだ誰の汚い手垢もついてなくて、本当に心の底からこの人が好き！っていう人と同じ職場で、しかもプライベートでも会おうと思えばいつでも会えるだなんて.....最高に贅沢な立場よ、あんたは。わたしに言わせればね」

「そりゃそうかもしれないけど。でもね、わたし友彦さんの息子と同年だし、しかも和久なんてわたしのこと、これっぽっちも女だなんて意識してないのよ。お母さんと家政婦と友達を三で割ったような感じっていうのかなあ。これでもしわたしが綾香みたいな美人だったら、今ごろ従兄同士で結婚してるかレイプされてるかのどっちかよ、たぶん」

「ところでその和久くんて」と、綾香の瞳が一瞬、あやしげに輝いた。男を物色する時、彼女はいつもそんなふうに、意地の悪い目つきになる。

「ネクラでボンクラだっていう話だったけど、ルックスのほうはいけてるの？」

「まあ、十人並みってところかな」と、あたしは肩を竦めた。「まあまあなんじゃないの？ 見た目ちょっと体育会系に見えるけど、綾香の言うとおりの、あいつの場合問題なのは内面よ。漫画とゲームと映画が大好きっていう超オタク男だもん。好きな女のタイプはキャサリン・ゼタ＝ジョーンズと綾波レイ。しかも真顔で言うから。マジやばいって」

さもおかしそうに、綾香はくすくす笑っている。

「結構、面白そうな奴じゃない。流石は由架理の従兄だけあるっていう感じ。ねえ、今度会わせてよ」

「いいけど」と答えつつも、あたしはややためらった。もしも和久が綾香の魔性の毒牙にかかった場合——立ち直るのは難しいだろうと、そんな気がしたからだった。綾香は和久にとって、ヴ

イジュアル的にはもろ好みとっていいタイプだったから。「でも、一応わたしの従兄だと思って注意してよ。他の男と二股かけて傷つけたりとか、そういう相談にはできれば乗りたくないから」

「わかってるってば。そこのところは大丈夫よ。こう見えても一応、手を出していい男とそうじゃない男の見分けくらいつくしね」

そのあと綾香とわたしは、彼女が「つまらない」と言って嘆く大学の愚痴話や、現在彼女がつきあっている「顔だけいい男」の奇妙なセックス癖について聞き、酔いがまわったせいもあって、カウンターを叩きながらげらげら笑った。

綾香が嫌味でも自慢でもなんでもなく、本当に顔しか取り柄がないというその<彼>は、女性的下着を集めるのが趣味で、綾香はいつも奇抜でセクシーなランジェリーを着てお相手を勤めているとのことだった。だがつきあっているうちに、彼のほうの性癖がだんだんあらわになっていき、今では女王さまと下僕状態なのだという。

「ハイヒールの踵でペニスを踏んでくれっていうから——仕方なくそうしたんだけど、なんか向こうがあっうーんとか言って悶えてるの見てたら、「もうそろそろこいつとも終わりかな」って、そんな気がしてね」

カウンターの向こうでは、まだ三十そこそこの若いマスターが、爆笑したいのをこらえるような仕種で、シェイカーを振っている。面白い話を聞かせてもらったお礼にと、ただでカクテルを一杯、御馳走してくれるというのだ。

綾香は確かに、自他ともに認める恋多き女で、振られたほうの男が一度、ストーカーと化したこともあるくらい、魅力のある魔性の女だった。でも同時に彼女にはどこか、神秘的で汚れがなく、素直で真っすぐで優しいところもあり——もしその矛盾を看破することのできる男が彼女の人生に現れたとしたら、その男こそ綾香の本当に求めている男性なのではないかと、わたしは彼女の恋愛話を聞くたびに、いつもそんなふうに思う。

聖女および聖処女と呼ばれる女のタイプにもっとも近いのは実は、修道女ではなくて娼婦性を持った女ではないのか——わたし自身は常々そんなふうを感じているのだけれど、何しろわたし自身がまだろくに恋愛経験のない正真正銘の処女だったので、本当のところはどうなのか、それはまだわからない。でも綾香がいくら男を取っかえ引っかえしつつ、ヤリマン道を突き進んでいるのを見ている、不思議と不道德だとか、汚らわしいといったような感じはまるで受けなかった。もっとも綾香の場合、これまで彼女自身が経験してきた過去にも、その理由は存在していたのだけれど。

第2章

綾香とあたしは、中学校の三年間、同級生だった。彼女の姓は、彼女の両親が離婚するまで鬼島といい、名字が斎藤のあたしとは最初、五十音順で席が前と後ろだった。そしてそのあと掃除当番や班分けの時などにも同じグループになり、自然と互いに話す機会が増え、やがて親友になったというわけだ。

中学時代、綾香とわたしは影で他の女子たちから「レズなんじゃない？」と囁かれるくらい、仲が良かった。これは今でもそうなのかもしれないけれど、綾香はようするに同性の反感を買いやすいタイプの美少女だったので——わたしたちはふたり、クラスの中で孤島に住んでいるようなものだった。

無神経な男子たちからも、ブスの斎藤とマドンナ鬼島といった感じでよくからかいの対象にされたし、わたしたちはお互い以外、慰めあう相手のない者同士だったから、いやが上にも友情による結びつきは強いものになっていった。そんな中で、女子たちの何人かが自分たちのグループにわたしのことを引っぱりこみ、綾香のことをクラスで孤立させようとしたことがある。

「本当は斎藤さんだって、鬼島さんのこと嫌だと思ってるんじゃない？」

クラスで一番影響力のあるグループにいる、リーダー格の女子にそう言われた時、わたしはただ「べつに」と答えただけだった。そしてリンチのような包囲網の一角を崩して、図書委員の当番をしていた綾香のことを図書室まで迎えにいったのだった。帰り道でわたしは綾香に、そのことについては特段何も言わなかったけど——それでも彼女はどこかで気づいていたんじゃないかと思う。でもそれを言ったらわたしだって、「ブス」とか「ブタ」と言ってからかってくる男子たちから、彼女には随分守ってもらった。だからお互いさまといえばお互いさまだったのだ。

綾香が本人さえもあずかり知らぬ恋愛沙汰で、上級生からトイレに呼びだしを受けるほどの美少女だといっても——わたしは一度として彼女に嫉妬したということはない。それは今も同じだった。恋多き美しい彼女のことを、確かにとても羨ましいとは思う。でも嫉妬までしたということはない。これでもしわたしがもっと中途半端に可愛かったとしたら、もしかしたら自分でも苦しくなるくらい、わたしは綾香に対してどす黒い嫉妬の感情を抱いたのかもしれない。

今だって、一緒に街を歩いていると、どうしてあんな美人があんなブスと一緒に歩いているのだろうといったような、奇異の視線を向けられることはある。でもかえってそのくらいレベルが違いすぎると——羨望することはあっても、嫉妬するということはほとんどなくなってしまう。たとえばそれは、普通の一般人がスーパーモデルに粘着質の嫉妬の情を抱いたりしないのと同じようなものだ。彼女たちは自分たちとは住む世界の違う美の国のミューズなのだと思えば、誰も腹なんて立てたりはしないだろう。ようするに綾香は、わたしにとってそういう存在だった。

その上、彼女には同情してあまりある過去があった。彼女が中学三年生の終わり頃、地方議員であった父親が、汚職事件で捕まったのである。それは綾香の父親にしてみれば、善意で口利きをしたことではあったのだが、マスコミにすっぱ抜かれて議員を辞職するまでに追い詰められた。鬼島、というのは珍しい名字であるし、あの汚職事件を起こした鬼島龍之介の娘、ということにでもなれば、綾香が学校でいじめにあうかもわからないと心配した父親は、妻と離婚した。ゆえに、綾香の名字は今美原という。でも親子三人で仲良く暮らしているし、綾香が地元から引っ

越して札幌の高校へ進学することになったのは寂しかったけど——事情が事情だから仕方のないことと、わたしは涙をこらえた。

しかし、美人というものには悲劇がつきものなのかどうか、綾香は進学した高校で、やはりいじめのようなものがあった。綾香の通っていた高校は市内でも指折りの進学校で、まわりは優等生ばかりの校風も比較的緩やかな、環境的にはいじめなど発生しにくい学校であるかのように、表面的には見えた。綾香自身もまた、そのことに安堵感を覚え、仲のよい友達ができただけでもあり、これで一安心というように思った頃——彼女は友人のひとりに頼まれて、グループ交際のようなものをするようになった。ようするに、その友達の彼氏の友人と軽くつきあうようになったわけだ。そして何度か四人でデートを重ねたある時——綾香はその男ふたりに、電話で呼びだされた。綾香の友人を含めた三人で、ちょうど今盛り上がっているところなんだ、と彼らは言った。彼女は特になんの疑いも抱くことなく、よく四人でいったカラオケボックスへでかけていき——そこで、最初からそのことが目的だった彼らふたりにレイプされたのだった。

綾香が何よりも一番ショックだったのは、それが最初から彼女の友人自身の手によって巧妙に仕組まれた罠だったということだ。いわゆるデートレイプというものの範疇に含めていいのだろうと思う。また綾香にとってそのふたり組の男というのも、一見真面目そうで、信頼のおけるなかなかの好青年のように見えたことから——彼らが自分の本性を隠して演技をしていたとはとても思えないと綾香は言った——彼女は深く傷ついて、立ち直るのが難しい人間不信の沼へと沈みこんでいった。

でもそんな事件のあった時も、綾香からくる手紙はそう暗いものではなかった。今にして思えばそれは、表面的にだけうまくいっているように見せかけた、極めて上滑りな内容の手紙だったわけだけれど、彼女が本音を吐露するようになったのは、わたしの妹、麻亜子が自殺してからのことだった。

わたしたちは互いに互いの心を慰めあうかのように、それまで以上に頻繁に手紙のやりとりをし、電話では時折、何時間も涙ながらに話しあうことさえあった。綾香もわたしも、自分の人生に降りかかった悲劇について、体験を共有するための誰かが必要だった。そしてわたしたちが高校を卒業するという時——もう自分の両親とは暮らしたくないと言ったわたしに対して、綾香は一緒に暮らさないかと持ちかけた。もちろん、いくら彼女の家がお金持ちでも、流石にそこまで彼女の好意に甘えるわけにはいかないと思ったから、わたしは札幌で本屋を営む友彦おじさんに色々相談して、彼の家に身を寄せるということになったわけだ。

手紙では一度もそのことについて触れられてはいなかったけれど、綾香はわたしと手紙のやりとりをしている間も、援助交際をしてたくさんの男たちと寝ていた。それはお金のためではなく、受験勉強の気晴らしをするのにちょうどいい行為であったという。それに初体験がレイプだったという記憶と経験の重みから逃れるためにも、綾香には墮ちるところまで墮ちるという行為が必要でもあったのだ。そうして初めて、最初の体験の重さが徐々に軽くなっていき、男なんてどうせ似たりよったりの馬鹿ばかりなのだという一種悟りきった境地にまで到達することができたというわけだ——もちろん、それは彼女の年齢がまだ十九歳だということを考えれば、空恐ろしいことではある。

「でもね」と、それまでの自分の恋愛経験をすべて語り終えたあとで、綾香はこう付け加えた。「それでも男の人に対してまるきり夢を持っていないっていうわけじゃないのよ。確かに由架理の好きな友彦おじさんみたいに、本当の意味でのいい男の人っていうのは存在してるんだと思う。でもそういう男に自分が出会って恋に落ちて結婚するなんていうふうにはとても思えないし、第一確率低すぎよ。それにいい男っていうのは大抵、すでに結婚済みだったりするしね」

いい男はすでに結婚済み——確かにそれはそうなのかもしれない、とはわたしも思う。友彦おじさんだって、十年前に奥さんをガンで亡くしていなければ、今も妻帯者だったはずなわけだから。でも、そんなふうにと考えるとわたしの気持ちは複雑だ。綾香の言うとおり、自分は今、とても恵まれた恋愛環境に置かれているのかもしれない。目の上のタンコブ（和久）はいても、友彦さんはやもめおじさんだったし、若い肉体とやらを武器に迫りまくればおじさんだって、わたしのことを姪としてではなく、ひとりの女として見てくれるようになるかもしれない。

「あーあ、でもなあ……」と、思わずぼそりとわたしが呟いていると、レジに客がやってきた。（——アルフォンス・ミュシャの画集かあ。なかなかいい趣味してるじゃん）

そう思ってわたしが目を上げると、そこにはこのところよくうちの本屋へやってくる、背の高い黒ずくめの男の姿があった。ちょっと人の目を引く容貌をしているので、彼が店内に現れると、わたしはついそちらに目をやってしまうことが多い。

何も、いかにも万引きしそうだとか、そういうあやしい雰囲気や霧を彼が醸しだしていたからではなくて——なんとなくその男の人は全体に色素が薄いような印象なのだ。もし彼が今目の前で倒れたとしたら、間違いなく何か持病を抱えていて、発作が起きたのだろうとわたしは確信したに違いない。

「ありがとうございました」

釣銭を渡すと、彼は本を手に黙って店をでていこうとした。そしてドアの前で立ちどまり、雨催いの空を暫く見上げてから、もう一度レジ番をしながら伝票をチェックしているわたしの元へとやってきた。

「あのう……突然こんなことを言って、あやしまれるかもしれませんが」と、その男は大切な秘密でも打ち明けるように、小さな声でぼそぼそと囁くように言った。

「僕の絵のモデルをやってみるつもりはありますか？」

第3章

「さっきの男、一体なんだって？」

上の事務所から階段を下りてくる途中、和久は踊り場のところで暫く立ち止まり、わたしと謎の男とのやりとりを黙ってじっと眺めていた。わたしは黛と名のるアマチュア画家に対して、再三「モデルなんかするような容姿じゃありませんし」と言って断ったのだが、彼は返事は今すぐじゃなくて構わないと言い、もし気持ちが固まったらここへ連絡してくださいと言うが早いか、名前と電話番号の書かれたメモ用紙を一枚、置いていったのだった。

「んー、なんか絵のモデルをね、してほしいんだって」

すると案の定、和久はブツと吹きだしている。

「由架理が絵のモデル！？あの男、視力0.01切ってるんじゃないかねえのか。こういう顔の女をねえ……ふーん。たで食う虫も好きずきとは言うけど、世の中には変わった趣味の男もいるもんだ」

「何よ。べつにいいじゃない。それよりあんたがレジやるんだったら、あたし返本の伝票書いてダンボールを結束しちやいたいんだけど」

「どうぞどうぞ。今日天沼さん風邪で休みなんだってな。親父とふたりでさぞ忙しかったろ。適当に休憩しながらやるといいよ。俺もなんかわかんないことあったら聞きに行くからさ」

<またたび堂>は中堅クラスの書店である。近年書店経営はますます苦しくなるばかり、と言われるとおり、当然我が本屋も例外ではない。実際のところ、店主である友彦さんの経営手腕がなかったら、今ごろかなり危ない橋を渡っていたに違いない。わたし自身は文庫の発注を担当しているのだけれど、それだって文芸書を管理している友彦さんの助言を仰いでから発注するのだったし、その他児童書と童話にやたら詳しい山波さんや、実用書のエキスパートである天沼さん、さらにこれに加えて漫画とゲームオタクの和久がまたたび堂を支える主要メンバーだった。他にはパート社員やアルバイトが数名いるのみだったけど、友彦さん自身に人を見る目があるのかどうか、一緒に働いていて不愉快な感じのする人間はひとりもないといってよい。

書店の二階は友彦さんの趣味の古書を集めた部屋と事務所が一緒になっていて、彼は朝、新刊の本や雑誌などを陳列し終わると、すぐにそちらで経営分析に入る……というとなんだかいかにも聞こえがいいが、ようするに本を読みまくったりインターネットで色々な情報を検索しまくったりしているわけで、一見してたださぼっているようにしか見えなかったりもする。でもやはりそこはそれ、事務所に上がってきた社員やアルバイト学生（和久を含む）を相手に軽くコミュニケーションをとったり、また不測の事態が起きた場合にはすぐ下へおりてきてくれたりと、やはり最後はさすが店長という感じで頼りになる人である。

北海道には一応、梅雨はないとされているけれど、それでもなんだかむしむしじめじめして湿度の高かったその六月下旬の午後、わたしは退社前に友彦さんと事務所で、いつものように軽く世間話のようなものをしていた。そしてわたしはふと、昼間やってきた全身黒ずくめの病弱そうな男のことを思いだし、友彦さんの反応を窺ってみようと考えた——たぶん、心のどこかで「そんなどこの馬の骨かもわからんような男のモデルになったら、何をされるかわからんじゃないか！」と、そう怒鳴ってほしかったのかもしれない。何しろ彼は滅多なことでは声を荒げたり

するような人ではなかったから。

しかし、わたしの予想に反して友彦さんは、

「絵のモデル？いいねえ。全身黒づくめで病弱そうっていうと、いつもよく画集なんかを買っていく人だろ。セザンヌにドガ、ロートレックやシャガール、シーレにクノップフ、モディリアーニ……僕はあれをねえ、いつどんな人が買っていくだろうと思ってわくわくして待ってたんだが、彼みたいな人が買っていってくれて、本のほうでもさぞ幸せだろうと思うよ。なに？今日はミュシャの画集を？なんだかいかにも彼らしいなあ。まあその薫さんという人がどんな人かはわからないけどね、たぶん画学生か何かじゃないのかい？これは僕の直感だが、きっともって彼はとてもいい絵を描くに違いないよ」

「……じゃあわたし、思いきって脱いでみようかな」

ほとんど投げやりな感じで、わたしは暗く呟いた。

「ハハハ。いやまさか、彼も急にヌードを描いたりはしないだろう。まあ実際、なんていうのかな、こう……お互いの呼吸があった時に由架理ちゃんのほうでそういう気持ちになったとしたら、それはそれでいいんじゃないかな。彼はなかなかの好青年でもあるし」

（どこが！）とわたしが心の中で叫んだ瞬間、背後に人の気配がした。和久だった。

「何はんかくさいこと言ってんだよ、親父。あいつ、絶対ちょっと雰囲気あやしいっていうか、ちょっとまともじゃないって。大体いつつも必ず黒づくめの服着てるそこからして普通じゃねえよ。電話なんかしてモデルになんかなってみろ。速攻犯されちまうぞ」

いや、流石にそれはないと思うけど……とわたしは言いかけたが、いつになく和久が真剣な顔をしていたので、そのまま押し黙った。

「由架理、送って行ってやっから、ちょっと待ってろ。あとこれ、コミックスの発注書。最終チェックと打ちこみよろしく」

時計を見ると七時だった。和久はもう一度下へおりて戻ってくると、わたしの腕を半ば強引に引っ張って店から連れだし、自分のバイクの後ろに乗せた。わたしには理解不能だったけど、彼の言う男の美学とかいう奴で、自分の愛車には絶対人を乗せないことにしているのだそう。だからわたしはその日、初めて和久のバイクの後ろに乗った。そして彼は中島公園そばの安アパートの前でわたしのことを降ろすと、最後にもう一度「絶対あんな変な奴に電話なんかするんじゃないぞ」と念を押してから、排気音とともに薄闇の中へと去っていった。

これがもし少女漫画か何かだったとしたら——先の展開は読めている。和久はこれを機にわたしへの愛に目覚め、ふたりは従兄同士で結婚……なんてことになっちゃったりするのかもしれない。でもこれはあくまでも現実だ。和久の怒りはただ単に、女友達に対するのと同じようなものなのだ。たとえばわたしだって——綾香がもし、同じように突然男に声をかけられてモデルをやってみようかな、なんて言ったら、絶対に怒って止めただろう。それと同じことなのだ。

わたしはワンルームの、十畳しかない狭い部屋で、冷蔵庫の残り物をかき集めて料理しながら、友彦さんのことを思った。彼が芸術を愛する人であることは、自宅にある美術書のコレクションなどを見て、よくわかってはいるつもりだった——それと彼が一般の良識に当てはめて人のこ

とを判断したりしない人だということも。でもだからって、自分の姪にあっさり「ヌード？いいねえ」なんてことを言ってしまうものだろうか。嫉妬なんかしてくれなくてもいいから、せめて叔父として常識的に「ヌード？そんなの絶対イカン！」と止めてほしかった。そしたらわたしも——黛理一郎なんていう、インチキ病弱神父に、自分の裸の絵なんか絶対描かせたりしなかっただろうに。

わたしは和久がしつこく止めたにも関わらず、黛理一郎と名のる男の携帯に電話をし、モデルになっても構わない旨を伝えると、自分の休日である木曜日に、札幌郊外にあるカトリックの修道院まで出掛けていった。

バスに乗って終点でおりると、そのあとのどかな田園地帯を、ポプラ並木に沿って青空の下、のんびり歩いていった。終点——聖アントニウス修道院とバス亭に書かれているだけあって、場所はすぐにわかった。近辺にはどこかの農家の壊れかけたサイロや、牧草を食む十数頭の牛のいる風景が広がる以外、見事なまでに何も無い。そんな中で遠くに白い壁の、屋根のてっぺんに鐘のついた尖塔を見つけて、すぐにあそこが『聖アントニウス修道院』なのだろうと見当がついたというわけだ。

それでも、目的地に辿りつくまで、結構歩いたと思う。十分くらいだろうか。そしてようやく修道院の門が見えたというところで——茶色い小径を飾るポプラの樹の下に、黛理一郎が立っているのを発見した。

「こっちだよ」

彼は誰か人に見られるのを怖れているかの様子で、すぐにわたしを手引きして、林の中へと分け入っていった。その日の札幌の気温はたぶん、二十四度くらいあったんじゃないかと思うのだけど——手を掴まれた時、あんまり彼の手が冷たかったので、わたしは一瞬びくりと全身が震えるのを感じた。

「冷え性なんだ」

黛さんはそう言って笑いながら、手を擦りあわせていたけれど、わたしはその時ようやくほっとして、隣で彼の笑い顔を眺めた。人畜無害の好青年——それがその時、わたしが彼に対して抱いた印象だった。

足元の笹藪をかき分けるようにして歩いていくと、やがて近くに小川の流れるさらさらという音が聞こえて来、その先に水車小屋があるのが見えてきた。といっても、今は使用されている気配などまるでなく、外見は廃屋も同然だったが、わたしは自分が幼い頃を感じた懐かしい冒険心のようなものを思いだして——にわかに魂が活気づき、心が童心に返っていくのを感じた。

「わあ！なんだかとても素敵なおうちね。わたし、こういうの大好き！」

どうしてなのかはわからなかったけど、わたしはその後ずっと、まだほとんど何も知らない男を相手に、べらべらと色々なことを喋りまくっていたと思う。うまく説明できなかったけれど、彼には人にそうさせる何かがあった。あるいは都心を離れた自然の空気や匂いといったものがわたしの心の中の何かを解放させ——そうさせたのかもしれない。

「水車のほうは壊れてしまっているけどね」

そう言って彼はわたしを板張りの室内へ通し、暖炉のある部屋とその奥にあるアトリエのよう

な場所へと、わたしのことを案内した。

「ここまで整えるには苦勞した」と彼が言うとおりに、見た目のボロ屋とは違い、内装のほうはかなりきちんとしていて、油絵の具の匂いに混じって、ペンキのシンナーの匂いがあたりにはまだ微かに漂っていた。全体に埃っぽくて湿っぽい感じのする部屋ではあったけれど、そこに並ぶいくつものキャンバスに描かれた息を飲むような絵の数々が、すぐにすべてをわたしに忘れさせた。

——ユディットの首狩物語を題材にしたものや、ヒエロニムス・ボスの『快樂の園』を思わせる地獄絵図、聖母マリアの受胎告知、聖アントニウスの幻視など……何枚かの絵をのぞくと、総じてどこかグロテスクなものが多く、わたしはそこに描かれた絵からひとつの歪んだメッセージを受けとったような気がしていた。それは死への恐怖、生への気の狂いそうなまでの執着、決して満たされない貪欲なまでの願望……そうした描き手の心の内側が垣間見えるような気がして、思わずわたしはぞっとした。

（こんな絵が描ける人は、人間じゃない）

そう思って振り返ったけれど、黛理一郎は極めて涼しい顔のまま、イーゼルにキャンバスをのせ、慣れた仕種でパレットの上に絵の具をチューブから押しだしていた。

「僕は小さな頃、ここの修道院の前に捨てられていたんだ」

彼はああしろとかこうしろと言うでもなく、眼差しでわたしに命令しながら、絵筆に絵の具を掬いとり、すでに創作を開始している。だからわたしはただ、彼の目が命じるとおりに動くだけでよかった。

（椅子に座って——そう。あとは楽にしていればいい）

「十二月二十四日、ちょうどクリスマスイブの、寒い雪の日のことだったそうだ。ブラザーたちの話によると、年に何度か、そうした何か勘違いした子捨てがあるのだそうだよ。おそらく捨てた親自身がクリスチャンだったとも思えないが、聖母マリアさまの慈悲深いイメージとでもいうのか、神さまの御加護がありますようにとの思いからなのかはわからないけど、修道院の門の前に捨てていくわけだ。僕はそのあと、高校を卒業してから東京にあるカトリックの神学校で学び、神父として再びこの地に戻ってきたというわけなんだ」

「それはつまり……その……」

いかにも日曜大工で作ったというような、木製の椅子に腰かけたまま、わたしは所在なげにあたりを視線を泳がせた。壁にかかった十字架上のイエス＝キリストの絵と目があう。彼は白目を剥いた血だらけの惨めな肉体を曝してはいたが、なおその眼差しの先にあるもの——天の国を仰ぎ見ているという構図だった。

「楽にしていよいよ。話したければいくらでも何を話しても構わない。僕は向こうで神学校を卒業してから二年ほど教会の奉仕につき、そして体の具合を壊してしまってね、生まれ故郷ともいえるここの修道院に、静養をかねて戻ってきたんだ」

「……どこか、悪いの？」

彼がおそろしく速いタッチで絵を描き進めていくのを見て、わたしは自分が何かを邪魔しはしないかと、おそろおそろそう訊ねた。

「生まれつき、心臓のほうが悪いんだ。といってもまあ、そう重症ということもないんだけどね

。でも激しい運動やセックスをしたりすると、寿命を縮めることになるらしい。医者のお話によると」

その時の彼の顔の表情には、読みとり難い何ものかが潜んでいた。だから変なことをされる心配はないと思って安心していい、というようにも、実際にはかなり激しいセックスをした経験があるが、心臓のほうには特段影響はなかったようだ、と言っているようにも見えたし——そのあとわたしはただ黙ったまま、彼が雄弁に喋りまくることに対して、静かに耳を傾けるという姿勢をとった。

そして二時間が過ぎて宵闇が迫る頃、わたしが生まれて初めてモデルを勤めた絵は完成した。その絵は実にわたしという人間の内面を表していて、思わずわたしは恥かしくなってしまったけれど、あえて彼には何も言わなかった。

肩には力が入り、足は心持ち内股で、顔の表情には臆病さと不安が入り混じったような、複雑な固さが宿っている。たぶん、他の人から見ても、自分はこんな人間なのだろうと思い、生まれつき顔が不細工だとかそんなようなこととはまったくべつに——なんだかひどくがっかりしてしまった。

「まだ最初はね、こんなものだよ」と、画材を片付けながら、薫は言った。「君がもしもっと僕に対して心を開いてくれれば、絵のほうもそれに比例して良くなっていくと思うから」

（そんなものかしら）とわたしが訝しげに首を傾げていると、彼はわたしの心の内を読んだように笑った。

「大丈夫。何しろ君は、僕が生まれて初めてモデルになって欲しいと思った人なんだから。それより、だんだん暗くなってきたから、早く帰ったほうがいい。バス停まで一緒に送ってあげたいんだけど、そんなところを修道士の誰かに見られたら大変なんでね——申し訳ないけれど、次にくる時は君のほうで直接、このボロ小屋まできてほしいんだ」

「そんなことは構わないけど」と、わたしは自分がここから立ち去り難く感じていることに気づいて、少し戸惑った。「次は、いつきたらいいの？わたし、毎週木曜日の休み以外に、週にもう一日、休みがあるんだけど——そっちのほうは月曜だったり火曜だったり、その時のシフトによるから。それに、あなたにだって都合っていうものがあるでしょう？」

「僕のほうはどうとでもなる」彼はイーゼルからたった今描きあげたばかりの絵をとり上げ、満足そうにそれを眺めながら言った。

「修道院での生活はね、大体毎日何時に何をするか決まってるんだ。朝の礼拝や聖体拝領にはじまって、食事がすんだらおのおの、それぞれの仕事につく……すべてが自給自足の生活だから、家畜の世話やら畑仕事やら裁縫やら、なすべきことは山のようにある。もっとも僕はね、今は静養中の身だし、ブラザーたちも気を遣って、自分の好きな絵でも描いてろってそう言ってくれてるから、君の都合に合わせるのはそう難しくないと思うよ」

じゃあ、とわたしは言ってショルダーバッグの中から勤務表をとりだし、次の休みの日を確認した——四日後の月曜日。そして何時頃ここへきたらいいだろうかと訊ねた。

「できれば昼すぎがいいな。僕は午前中はいつも、裁縫仕事に励んでいるから。この服もね、僕が自分で型をとって裁断して作ったものなんだよ」

彼は高校生の学生服にも似た、独特の質感の黒い服を、どこことなく自慢気に見下ろしている。確かにそれは既製服のようにしか見えなかったけど——それより、どうして今までわたしは彼が聖職者であることに気づかなかったのだろうと不思議になった。おそらく、年齢と顔と雰囲気、あまりにもそぐわなかったせいだろうとは思っただけ。

夕暮れの中、薄暗い林の中を歩いていくと、修道院の建物から鐘が鳴り響いてくるのが聞こえた。腕時計を見ると六時——わたしはキリスト教について詳しいことは何も知らなかったけれど、カトリックの修道院＝戒律が厳しいというイメージが強かったので、彼のことがなんだか急に気の毒に思えてたまらなくなった。

そして帰りのバスの中で、彼が絵を描きながら話してくれたことを心の中で何度も反芻した。小さな頃から、俗世間から隔絶されたような環境で育つというのは、どんな感じのするものなのだろう、と。わたしは自分の親のことが今でも好きではないけれど、それでも捨てられなかっただけでもありがたいと思うべきなのだろうか……そう考えるとなんだか複雑だった。それに、わたしは自分が天涯孤独の自由の身だったらどんなにいいかと空想の世界で憧れたことが何度もあったけど——本当に天涯孤独なんていうことになってしまったら、自分のアイデンティティを支えきれなくてひどく苦しんだであろうことは明白だった。

その苦しみをすべて神に委ねる——そんな清い生き方が果たして、自分に可能だったかどうか、はなはだ疑問だ。自分が修道院で育ったからといって、そのまま修道女になったとはとても思えないし、むしろキリスト教の教えにがんじがらめにされて、それに強い反発感を覚える……そんなところだったんじゃないかと、そう想像する。

時々、自分の真っ暗なアパートに帰りついた時なんか、ひどく自分が惨めな境遇であるように感じることもあるけれど——職場の人間関係にだって自分は恵まれているほうだと思っし、一応友達もいるし、困った時には友彦さんや和久に相談すればいいんだし……わたしは黛理一郎の絵のモデルになったその日の夜、初めて神さまに自分の恵まれた環境を感謝しつつ、深い眠りについた。

第4章

「僕がどうして君を、絵のモデルに選んだかって？」

次の週の月曜日、今度はわたしはソファの上に寝そべりながら、モデルの仕事をしていた……いや、ノーギャラなのだから、仕事というのはおかしいかもしれない。第一、モデルなんていっても、一ミリも動いてはいけないとか、そういう厳密さは全然求められなかったし、ただなまけものようにぐうたら一っと横になり、アマチュア画家と世間話をしていただけともいえる。

「わたしの友達にね、物凄い美人の女の子がいるのよ。たぶんその子のほうが……黛さんにいい絵を描かせるんじゃないかって、そんな気がするの。たぶん、わたしのほうから頼めばオーケーしてくれると思うし、どうかなって思って」

数秒、間があった。わたしは彼が自分のことをじっと見つめていることに気づき、うつぶせになった姿勢から身を起こした。

「その娘、処女？」

真顔でなんてこと聞くんだろうな、このエセ神父と思いつつも、わたしは恥じらいも何もなく開き直って答えた。

「ううん、違うけど……っていうことはつまり、わたしが処女だったっていうのが、黛さんがわたしをモデルに選んだ理由ってこと？でもこう言っちゃなんだけど、それならもっと美人の処女を選べばよかったのよ」

「まあ、美の基準は人それぞれだから」と、再び創作を開始しながら黛は言った。「僕は自分も含めて人間っていう生き物が嫌いだし、特に女が嫌いなんだ。だから絵の中に生身の人間を描いたことはこれまで一度もない。いや、修道士たちの肖像画なんかは何度か描いてるけど……女の人で描いてみたいと思った人は、君が初めてだ。僕はあの本屋で初めて君のことを見た時、人間じゃないと思ったから」

「なあに、それ」あまりの言い種に、かえってわたしはおかしくてたまらなくなった。

「そりゃあわたし、人に言われたことはあるわよ。マイケル・ジャクソンの『スリラー』のバックで踊ってたことあるでしょ？とかね。でもみんな冗談よ。あなたみたいに真顔でそんなこと言ったりしないもんよ、普通は」

「僕は真面目に言っている」と、彼はわたしに眼差しで命令しながら言った。姿勢を崩しすぎるなということだ。「君に初めて会った時——僕はちょうど、画集の種類豊富さに驚いているところだった。札幌の一番大きな本屋でさえ仕入れてないだろうっていう美術書なんか、結構多くあったからね。そして君はその本屋の店主らしき六十がらみの男と、何やら笑いあいながらダンボールの箱を運んでいるところだった。結束機が壊れたから、手で紐を結ばなくちゃいけないとか何とか言ってたっけ……その時、すぐに感じたんだ。この娘は人間じゃないって」

「だーかーらー」と、いかにもだるそうにわたしは聞いた。流石にそろそろ、うつぶせになっているのも飽きてきて、足をばたばたとばたつかせる。「わたしのどこが人間じゃないってのよ。確かにね、あなたの絵の中に登場している化け物のひとりみたいに思ったっていうんなら、まあわかんなくもないわよ。何しろわたし、スリラーのバックで踊ってたんだから」

「鋭いね」と、黛は長方形の大きなキャンバスに絵筆を走らせつつ、話を続けた。「僕はああし

た絵を、幻を視ることによって描くんだ。君も言ってたね。ヒエロニムス・ボスの地獄絵図を思わせるって。僕が思うには——ボスの『快樂の園』は、彼自身にもし絵の解釈を求めたとしても、本人にさえおそらく描いた理由なんてわかってなかったんじゃないかと思うんだ。すべては幻視だよ。そして描き手は自分の見えたとおりに描く……ただそれだけなんだ。僕自身もね、絵を完成させたあとで、じっとそれを眺めて、自分の描いた絵そのものに教えてもらおうということがよくある。言ってみればまあ、いい絵を描くコツというのは、自分で描かないことだと言えるかもしれないな」

わたしは退屈そうに頬杖をついたまま、うつぶせの姿勢をなんとかキープした。彼に才能のあることはよくわかるけど、それでも芸術家っていう人種はやっぱり、ちょっと頭がクレイジーなのだろうと思った。

「つまり僕はね……幻視の世界でしか見たことのない、感じたことのない女が、実際に目の前で肉を持って動いているのを見て、びっくり仰天したというわけなんだ。あの時に感じた驚きといたら、今もなんて言い表したらいいのか、わからないくらいだね。天使にハンマーで殴られたくらいの衝撃があったから」

「ふうん。世間一般じゃそういうの、一目惚れっていうのよ。でも黛さんはわたしに恋してるっていうわけじゃないし——なんか変じゃない？そんなの」

「それはどうかな」と、彼は自嘲するように笑った。「僕が君に恋していないだなんて、どうして君にわかる？もっとも、僕のほうではすぐにぴんときたけどね——君はあの本屋の、自分と三十は年が離れているだろう男が好きだ、そうなんだろう？」

いきなり凶星をさされたので、わたしは思わず彼のほうを振り返った。腕時計を見ると三時半だった。モデルをはじめで一時間半にもなる。流石にそろそろ背骨が痛くなってきた。

「そろそろ一度、休憩にしよう。といっても、コーヒーくらいしかご馳走できるものはないんだけどね——絵のほうは大体、あとはこれでなんとかなるよ。次の木曜日、君がまたきてくれるとしたら、その時までには完成しているだろう」

わたしは彼が隣の部屋へいくと、そそくさとキャンバスのほうにまわり、今度は自分がどんなふうにかかっているかと興味津々だった。でもそこには写真にでも撮ったような、生々しい裸婦の姿があったので——流石のわたしも、これには絶句した。

「気に入った？」

彼は紙コップにコーヒーを入れて持ってくると、そのひとつをわたしに手渡した。

「とってもね」と、わたしは皮肉をこめて言った。「なかなかの背中美人だと思うわ。でもこれじゃあ、モデルになった意味なんか全然ないんじゃない？背骨が痛くなった分だけ、損ってもんよ」

「いや、あのポーズには十分意味がある。少なくとも僕にとってはね——そうじゃなきゃ、流石に僕もここまでは描けないから」

「じゃあこれは、あなたがさっき言ってた幻視ってこと？もしそうなら、それはただの想像の産物よ。わたしの背中にはここに」と、わたしは左の肩甲骨の下あたりを指さした。

「赤い月のような形をした痣があるもの。それに肌のほうもこんなに白くて綺麗じゃないと思

う——これじゃあまるで、アングルの『グランド・オダリスク』みたいだわ。あの絵はとても綺麗だけれど、実際にはあんな胴長の女の人、いるわけないでしょう？それとおんなじよ」

「あたり」と言って、彼はソファに腰かけると、またもや目で命令した。隣にきて座れってことだ。自分でも不思議だけれど、何故かいつも彼の瞳の言うことには逆らえなかった。

「僕のイメージとしては、同じ感じなんだ。それとさっきの君の質問だけれど、これは幻視というわけじゃないよ。もしこれが幻視だったとしたら——僕はモデルなんて必要としない。まだ習作の段階だからなんとも言えないけど、これは僕にとっては生まれて初めての実験みたいなものなんだ。向こうから、こちらの世界へ移行するためのね……僕自身、うまくいくといいと願っているんだが、どうなるのかはすべて君次第ということだ」

「どういう意味？」コーヒーを一口すすって、わたしは単刀直入に聞いた。「ようするに、わたしに脱げってこと？しかもノーギャラで？」

「まずいコーヒーで申し訳ない」彼は顔をしかめながら言った。確かに、コーヒーの味は苦かった。「そうだね。こんなまずいコーヒー一杯で脱いでくれるというほうが虫がよすぎる。だから、君はそのままでもいいんだ。かといって首から下は僕の妄想というわけでもないんだけど……どうも説明が難しいな。というより、僕自身本当は、君には僕の言いたいことが実はよくわかっていると思ってるんだけどね。どうだろう？」

「たぶん、わかってるんだと思うわ」と、わたしは言った。コーヒーの苦みで、舌が軽くしびれたみたいになった。「たとえば——わたしがミケランジェロのダビデ像を見ても、この男とどうにかなりたいたなんて思わないのと似たようなものでしょ？いいわよ、べつに。脱いで。どうせ人からお金もらえるほどの体っていうわけでもないし。なんかよくわからないけど、黛さんはようするにスランプっていうか、画家として新しい方向を模索してるとかっていうやつなんですよ？たぶんわたし、そこらへんのことは勘違いしないと思う——わたしはあなたにとってはただの通過点なのね。次にもっと、美しい女の人を描くための」

「さあ、それはどうか」彼は窓辺までいくと、その下に黒い液体を撒き散らした。遠くのほうでギーッギーッとコゲラの鳴く声がしている。「僕はヴァイオリンの弓で、君はその弦だと言ったら、意味わかる？でも君は、あの本屋の店主のことが好きなわけだ。僕が思うには——彼よりも僕のほうがヴァイオリンを弾くのはうまいと思う。もっとも、両方とも試すっていうわけにはいかないから、すべては君次第なんだ。僕がいい絵を描けるのも、描けないのも」

やっぱりこの男はちょっとおかしい、わたしはあらためてそう思った。変に世間ずれしていないというのか、なんというのか……たぶん本当なら「ロマンティストなのね、黛さんは」とでも言うべきなのかもしれないけれど、残念ながらわたしはそういうキャラではない。

「黛さんはなかなか、いいところを突いてると思う。でもあの本屋の店長はね、わたしの叔父にあたる人なのよ。確かに好きっていうのは本当だけど、あの人は……友彦さんはわたしのこと、ただの姪としか思ってないわ。わたしのほうでもそのいい関係を壊したくないから——ずっと平行線なの。永遠にね」

理一郎は振り返らなかった。窓から裏の小川を眺め、ハンノキや葦にとまっているモズの姿をじっと眺めている……そしてわたしがショルダーバッグを肩にかけてアトリエからでていこうとすると、

「ユカリ」と言って、初めてわたしのことを名前で呼んだ。「次の木曜日、またここへきてくれる？べつに君が嫌なら、脱がなくてもいいから。それとモデル料も払うよ。この間、宗教画が一枚、結構な額で売れたんだ。そのほとんどはカトリック教会に寄付っていう形で渡したんだけど——司祭さまが少しは自分の懐に入れておくようにってってくれたんだ。だから……」

「べつにわたし、お金が欲しくてここにくるんじゃないもの。それに、モデル料なんかもらったら、かえって逆にもっと真面目にやらなきゃとか色々思って、ぎこちなくなっちゃう。あと、次にくる時はお弁当か何か作ってくるわ。こう見えて実は結構うまいのよ」

わたしはそのまま、彼の顔も見ずに水車小屋をでて、ひとりずんずん歩いていった。ピーヨ、ピーヨとナナカマドの樹でヒヨドリが鳴いている……この自然はなんだかまるで、彼の心そのものだという気がした。本屋にやってきた時の黛理一郎はもっと、存在感がなくて影が薄い感じだった。でもこうした自然に囲まれた中では、彼は存在感が濃く、あまり病弱な感じにも見えないのだ。これはただのわたしの直感だけど——東京のような都会へいったことが、彼の心臓の病気にはあまりよくなかったのではないかと、そんな気がする。ただでさえ貧血系の繊細そうな顔立ちをしているし、胴まわりなど、もしやわたしより細いのでは？という感じの男なのだ。思いきりエルボーを食らわせたなら、真ん中からぽっきり折れてしまいそうな気のするほど。

「やだなあ。あんな男、できれば好きになりたくないよ」

ポプラ並木を歩いていく途中で、わたしはひとり、そうごちた。確かに背はわたしより高かったし、顔だけ見ればわたしなどにはとても勿体ないくらいだったろう。彼は女が嫌いだと言っていたけれど、彼自身が女のような白い肌に長い睫毛、さくらんぼのような色の唇をしているのだ。今まで男ばかりの環境で、果たして何もなかったのだろうかとかと勘繰りたくなるくらい。

（——うーん。わたしのバイタリティであのか弱そうな男のことを守ってやれってか？心臓病だからセックスできないとか、そんなことはまあどうでもいいけど、それにしてもなあ、しかし……）

などと思いつつもすでにもう、わたしは黛理一郎のことを好きになりかけていた。そしてその次の日、またたび堂に出勤して、事務所で友彦さんの顔を見た時に——はっきりとわかってしまった。自分の気持ちがすでにもう、友彦さんから理一郎のほうに移ってしまっているということに。

第5章

内面を磨いていい女になる早道が、たくさん本を読むことだとは思わないけど——それでも、友彦さんのことを好きになり、彼の知識により近づきたくて、わたしはここ一年というもの、随分たくさん本を読んできた。

世界美術大全集にはじまって、世界文学全集、ニーチェやキルケゴールの哲学書や、イエイツ、ポー、ゲーテ、ワーズワース、ボードレールの詩集などなど……友彦さんの家の本棚には一万冊を越えるくらい本がぎっしり詰まっていたので、自分でお金をだす必要もなく、好きな時にいくらでもたくさん本を読むことができた。

そして結局のところ、気持ちが友彦さんから理一郎に移ってしまった今では——そうした知識を得たことは彼に出会うための準備だったのではないかとさえ感じてしまう自分がいる。

(やれやれ。わたしも奴のロマンティック病が移ってきたのかもしれないなあ)

木曜日の朝、重箱におむすびやおかずを詰めこみつつ、わたしはそんなことを考えた。鶏そぼろ入りおむすびに、アスパラのベーコン巻き、チーズ入りミニハンバーグ、タコさんウィンナーに卵焼き……などなど、さらにこの他にサラダと果物を小さなタッパに詰めればすべて完成、と。

そのあとわたしはお茶を飲みながら、『西洋美術の歴史』という分厚い百科事典のような本をパラパラめくって時間をつぶした。そしてきのう理一郎が言っていたヒエロニムス・ボスの『快樂の園』、『干し草車』、『聖アントニウスの誘惑』……といった絵にふと目がいった時、そろそろバスに乗らなくてはいけない時刻であることに気づいた。

(幻視ねえ)

それらの絵は、まるでそうとでも説明しなければ到底人間の手に描けるはずのない種類の絵画であるとは感じる。価値のない干し草を奪いあう人間たち、そして地獄へ落ちた人間どもを食らう異形の者ども……絵のスタイルはまるで異なるけれど、確かに理一郎の描く宗教画にも、まったく同じ雰囲気や匂いのようなものをわたしは感じていた。それは宗教画であるにも関わらず——どこか不敬虔で頹廢的なのだ。神の存在を確かに信じてはいるが、絵の中でくらい自分の信仰心を自由に表現してもいいはずだ、というような。

わたしはキリスト教徒ではないけれど、それでも本による知識はある程度あったので、理一郎が一枚一枚の絵にこめたメッセージ性のようなものは理解できるような気がした。つまり、妖怪の跋扈する地獄というのは本当の地獄という場所に存在する以前に、人間の心の内側にあるということ、幻視というのはすなわち——そのイメージを絵の中に固定化して再現できる能力のことをいうのではないだろうか。

「それは正解とはいえないけれど」と、理一郎は嬉しそうにお弁当へ箸をのぼしながら言った。「まあ、理詰めで考えたにしてはそう悪くない答えだとは思う。何よりもユカリがそんなふう僕と会っていない間も色々考えてくれたことが嬉しいよ」

「べつに、そういうわけじゃないけど」わたしはトマトとツナのサラダを、ごまかすようにもぐもぐ食べた。あらまあなんて美味しいの、というような白々しい顔をしつつ。「確かにあなたに

は絵の才能があるんだと思うわ。素人の目から見ても、そのことだけははっきりとわかる。で、とても不思議になったのね。生まれた時からそういう環境だったからってということもあるんだろうけど——神父になるか絵描きになるかで悩んだりしたことがきっとあるんじゃないかって。その矛盾とか葛藤がああした」と、わたしは壁にかかるダンテの『神曲』をモチーフにしたような、墮天使ルシファーの絵を指差した。「リアルなこの世のものとも思えぬ表現を生み出したんじゃないかって、そう思ったの」

「なるほどね。それはなかなか鋭い指摘だと思う」

そのあと暫くの間、彼はひとりがつがつとわたしの作ってきたお弁当を食べまくっていた。見た目は草食動物的な大人しい印象なのに、意外と肉食系というか痩せの大食いというか健啖家というか、とにかく物凄い食欲だった。

「もっとたくさん作ってきたらよかったわね。重箱三段くらい。まさかあなたがこんなに食欲旺盛な人だとは思わなかったから、あんまりたくさん詰めてこなかったの。今度くる時はまた別のメニューを考えてくるわ」

「こんなに美味しいものを食べたのは生まれて初めてだ」冗談でもお世辞でもなく、彼は極めて真面目な顔でそう言った。「ユカリと結婚するような男は、とても幸せだろうね」

バスで聖アントニウス修道院に到着したのが一時二十分ごろ、そして服を脱ぐでもなくすぐにソファへ横になってモデルをやりはじめただけけれど——彼はわたしが持ってきた紫色の風呂敷包みが気になって気になって仕方がないというように、そちらへばかり視線をやるのだ。そこでわたしは集中力散漫な画家に注意をし、芸術活動の前に腹ごしらえすることを提案したのだった。

「食べなかったら食べなかったで平気なんだけど」と、彼はわたしが持ってきたお茶をすすりながら、照れたように言い訳をした。「特に絵を描いている間はね、寝食を忘れることが多いから……でもユカリの言うとおりに、そういうことも含めて、ジレンマというか葛藤というのは常にある。神父になんてならず、絵描きになっていつでも自分の好きな時間に創作活動をして、好きなものを好きなだけ食べて、料理のうまい女と結婚して子供を作ったりとかね。もっとも僕は仮に自分が結婚したとしても、子供は欲しくないっていう人間なんだけど……ユカリはどう思う？」

「どう思うって言われてもねえ」わたしは空になった重箱とタッパを風呂敷に包みながら笑った。

「わたし、もし自分がもう一度小学生からやり直せって言われたら、たぶん首吊って死んだほうがましだって答えると思う。べつに、学校時代にいじめにあったとか、嫌な経験しかないとか、そんなわけじゃないのよ。でもね——ようするに今ってそういう時代じゃない。子供が子供らしく自然に生きられないっていうか、わたしが小さかった頃より、もっとそれがずっと悪くなるでしょ。だからね、やっぱり怖いなと思うの。自分の子供をきちんと守ってあげられるかどうかって」

「君は、いい人間だな」と、理一郎は顎の下で手を組み合わせながら言った。「僕のはね、もっと利己的な理由なんだ。自分が生まれた時から呪われているように感じるから——その呪いが自

分の子供にまで遺伝するんじゃないかって、それが心配なんだ。だからその呪いを跳ね返すことができるくらいの女じゃないと結婚は難しいだろうと思って」

「呪いねえ」わたしはわざと茶化すようにくすくす笑った。でも本当は、彼が何故そんなふうと思うのか、その気持ちはよくわかるような気がしていた。「この間、わたしの背中に痣があるっていう話したの覚えてる？それってね、母親が小さい頃わたしに折檻した傷痕なの。もっともその記憶はわたしにはないんだけど——よく言うでしょう？虐待された経験のある母親は、自分の子供にも同じことをする傾向があるって。それは無意識に刷りこまれたようなものだから、本人がやめたくてもなかなかやめることができない種類のものだって……そういう意味ではね、わたしも怖いよ。虐待された記憶がないっていうことは、もしかしたらそれだけショックが大きくて、忘れなければ自我を保てなかったっていうことでもあるわけでしょう？わたし、下に妹がひとりいるんだけど、妹のほうははっきり、母親がいつどこで何をしたか、詳しいことまでよく覚えてるの。だからいつも母親に対して、びくびく怯えてたわ……それに誰に対しても態度がどこか卑屈だから、学校でもいじめの標的にされて——十四歳の時に自殺したの。首を吊る前の日も妹は、べつにどこも変わったところはなかった。わたしもね、『なんであんたはいつもそんなにぐずぐずしてるの！』なんて、ごはんを作りながら怒鳴ってた。それがわたしが、妹の麻亜子とした最後の会話」

開け放した窓から、ギーッ、ギーッとコゲラの鳴く声が聴こえる。その日は、夏のはじまりを予感させる心地好い気温だった。濃い水色の空には真っ白な厚い綿帽子のような雲が浮かび、それは見ようによっては天使がラッパを吹いているような形に見えなくもなかった。

「つまらないわね、こんな話」

わたしは一瞬、目が潤みそうになって、窓辺まで行って目頭をこすった。板張りの床の上に何枚か、デッサンをとった画用紙が落ちていて、月型の痣が左肩の下あたりにあるのがわかる。全員、裸だった。

「そういえば今日、ヌードになるっていう約束してたんだっけ。この前の絵はどうなったの？もう完成した？」

「とりあえず、一応はね」

理一郎は深緑色の緞子のようなカーテンのかかった奥のほう、画材や自分の作品をしまっている棚のひとつから、長方形のキャンバスを持ってきた。そしてそれをイーゼルの上にのせると、白い布をとる。

「なんだか別人だわねえ」わたしは自分の絵を見て、甘い溜息を着くようにほれぼれとした。「理一郎って、もしかして視力が0.01切ってるんじゃない？どう見てもこの女の人、わたしとは別人にしか見えないんだけど」

「僕の視力は両目とも1.5だよ」どこか不服そうに理一郎は言った。「あとユカリの言った背中の痣だけどね、どうしてもうまくイメージできなかった。だからヌードになれとは言わないけど、背中の、この痣のあるところだけでいい。そこさえ見せてもらえれば、この絵は完成すると思う」

そんなのはお安い御用というように、わたしはブラウスのボタンを三つ外すと、遠山の金さんのように左肩だけはだけさせた。ブラジャーをしてこなかったのは正解だったと思った。

彼は十五分程度で絵を完成させると、ソファに後ろ向きになって座っているわたしのところまでやってきて、指でわたしの赤い痣をなぞった。ちょうど、三日月の形に。

「これ、火傷？何をどうしたらこんなふうに痕が残るのか、ちょっと謎だな」

「さあね」と、わたしはブラウスに左手をとおしながら言った。「焼きゴテを押したとか、流石にそんなことはないと思うけど……自分の背中なんか誰も、よほど意識しないかぎり鏡できちんと見たりしないでしょう？だから気にしたことはほとんどないの。友達と温泉にいった時なんかに言われて、ああそうだったって思いだすくらい」

「ふうむ」

彼は顎に手をやって暫くの間考えこむと、深緑色の分厚いカーテンの向こう側へいき、パイル地のガウンのようなものを一枚持ってきた。

「それ、着て。べつに裸にならなくていいから」

暖炉のある隣の部屋で着替えると、わたしはその白いガウン一枚だけを着て、彼の言うとおりに、木製の椅子に後ろ向きになって座った。赤い三日月型の痣だけ見えるように、左肩をはだけさせて。

その、わたしが今年になって初めてあじさいの青い花が咲いているのをアパートの近くで見かけた午後、時間の流れるのはとても早かった。何故って——わたしにしてみれば、考えることがあまりにもたくさんあったから。

うまく説明できないというより、これはほとんど女としての直感だった。このガウンを着たことのある女はわたしが初めてだというわけでは決してなく——おそらく、他にも何人かいるはずだった。でも「この詐欺野郎！」と言ってインチキ神父のことを罵ることもできなかつたし、少なくとも彼が表面的にはどうであれ、本質的な意味合いにおいて嘘をついていないということだけはわかるのだ。だからたぶん、わたしと最初に会った瞬間に「人間じゃない」と感じたという話も本当なのだろう。でもその前に何人か<普通の人間の女>をモデルにして、絵を描いた経験はあるはずだと思った。

「なんだか、心ここにあらずという感じだったね」

夕方までかかってある程度完成した絵は、とても平凡な出来映えだった。なんだか、作者にいくら技量があっても、モデルがぼんやりしていると、絵にも魂がこもらないといったような。

「それってわたしの責任？それともわたしが理一郎に抱かれないと思って色目でも使ったら、あんたはいい絵を描けるってこと？」

「否定はしないけどね」と、彼は意味ありげに微笑した。「逆に僕は、ユカリのそういうところが好きだ。それに、今日は僕のほうでもコンディションが悪かった。久しぶりにあんなに美味しいものをたくさん食べたから、腹のほうがかくちくなってね、注意力が散漫だったと思う。いいものを描くには、適度なハングリー精神が必要なかもしれないな。もしかしたら」

そんなもんかしらね、と思ってわたしは軽く肩を竦めた。そしてすぐに手早く着替えをすませ、ソファの背もたれのところにガウンをかけた。一体このガウンにこれまで何人の女が袖を通したのか——問いただしてみたくもあつたけど、彼が正直に本当のことを言うとも思えないと感じてやめた。

第6章

わたしはその週から次の木曜日まで、工作中、どことなくぼーっとしていた。よくある恋愛初期の症状である。シフトの関係でその週は六日間連続出勤することになっていたせいもあり、なおのこと理一郎への想いは募っていった。

(あいつ、心臓病だなんて言ってたけど、本当はそんなに大したことないんじゃないかしら。それともその逆で、ああいう形でしか性的に女と関われないから——禁欲的なエロティシズムの発露とかいうやつで、画業にとり組んでるのかしらねえ)

わたしはその日入荷してきたグラビアアイドルの写真集を数えて伝票をチェックした。そしてエロ本関係の雑誌が並ぶ棚の上のほうに、<新刊>の札と一緒にそれらを陳列した。

「おまえ何ぼーっとしてんだよ。女がこんなエロエロコーナーでぼーっとしてたら、客が変に思うだろうが」

「仕様がなくてしょ。仕事だもん」

わたしはさらにぼーっとしたまま、和久にそう答えた。

よくよく考えてみたら今日は土曜日だ。どうりで真っ昼間からこいつがいるわけだ。

「おまえ馬鹿？それ水島サヤカの写真集じゃん。一冊でも売ったらヤバイことになるって。今出版社を相手どって訴訟を起こしてんだろ」

「あ、本当だ」

「あ、本当じゃねえよ」

と言いつつ、ダンボールに水島サヤカの写真集を和久は戻している。

「ほら、伝票と一緒にご丁寧に回収のお願いの手紙まで入ってるだろ。よく見ろよ」

そうだった、忘れてたと思い、わたしは和久が気づいてくれたことに素直に感謝した。

「でもさあ、ぱらぱらっと中身見て思ったけど、ここまでキワドい写真撮ったんならさ、思いきって出しちゃったほうがよかったんじゃないかって、そう思わない？そのほうが女優としての株が上がったんじゃないかって、そんな気がするんだけど」

「さあね。でも記者会見で涙ながらに訴えてただろ。『女として複雑なものが……』とかなんとか。まあ、確かに俺にはわからんわ。こんな紐で縛りーの、ヘアだしーのしてカメラ目線で何枚も写真撮らせる女の気持ちつつうのは」

「でもこういうのにお世話になってるわけでしょ、あんたも」

「バーカ。俺をそこらの男と一緒にすんなって。こんな何人の男と寝てるかわかんないような女の写真見て、一体なにが楽しいんだよ」

「さようございますか」

わたしは軽く肩を竦めると、バックヤードのほうに水島サヤカの写真集を持っていった。まあ確かに、和久の言っていたことも一理あるのかもしれない、とは思う。でもそう言っても見ずにはいられないというのが人間の心理……というか男性の心理ではないかとわたしは思うのだけだ

。

(まあ、あいつは海の向こうのハリウッド女優と二次元のアニメキャラ専門だからなあ)

時々女の子からも電話がかかってきたりして、長話したり、どうやら恋愛の相談に乗ってあげ

ているらしい、なんていうこともあるみたいだから、心配なんて全然してはいないけど。

「おまえ、なんか最近綺麗になったんじゃないか？もしかして誰か好きな奴でもいいの？」

「何いってんのよ」

わたしは本が山積みになっている狭いバックヤードで、返本する本の伝票を書きながら、次々にダンボールにそれを詰めていった。

「それより真面目に仕事しなさいよ。あんた時々返本作業しながら漫画の本とか読んでるでしょ。みんな知ってるけど、店長の息子だからと思って何も言わないだけなんだからね」

「へいへい。たださ、本当に好きな奴とかできたら、教えてほしいと思ってね。由架理がどういうタイプの男を好きになるかとか、俺すげえ興味あるし」

「すげえ興味ね」と、わたしは軽く肩を竦めて溜息を着いた。

もし理一郎が、時々客の中にいる、こそこそしたような低姿勢でエロ本を買っていくような、わかりやすい男だったとしたら——わたしも軽い自慢がてら、和久に彼のことを話していたかもしれない。でも、わたしは理一郎のことを誰かに話したりするのが怖かった。よくわからないけれど、彼のモデルになっているという秘密を一度誰かに喋ってしまったとしたら——次にあの水車小屋へいった時、そこには誰もおらず、壁にかかった絵もイーゼルなどの画材も何もかも消えてなくなっているのではないかと、そんな不安な予感めいた気持ちが胸を締めつけるのだった。

わたしが実際に恋をして綺麗になったかどうかはともかくとして、和久が男がいるのではないかとあやしんだのも無理はない。和久はわたしが休みの時はしょっちゅう、暇だったらメシ作りにきてくれと電話してくるのだけれど、ここのところずっと、休日は留守電になっていることがほとんどだったからだ。

綾香とは毎日のようにメールで連絡しあってはいたけれど、「遊びにいこう！」と誘われても、わたしは仕事や叔父と和久の家の世話を理由に断ることが多くなった。それでも金曜や土曜の夜に、仕事が退けたあとでススキノへ飲みに行ったりは時々していたけれど——わたしは彼女にも、適当に言葉を濁して、友彦おじさんの他に好きな人ができた、という話しかしてはいなかった。

「もうちょっと上を向いて……そう。僕のほうは見なくていい。そのままの姿勢を保ってくれたら、あとはいつもみたいに適当に何か喋っていいよ」

どうも理一郎にはわたしの背中 of 痣に特別な思い入れというか、拘りのようなものがあるらしく、全裸になるようになってからもとるポーズは後ろ向きのものが多かった。確かにわたしは胸だってそんなに大きくないし、中肉中背の、「まあ一応は女らしいね」という程度の凹凸しかしていないと、自分でもそうは思う。わたしとしてもべつに特別、芸術家の神聖な眼差しでもってのみ自分の裸を見られることに異存があるというわけではないし、突然ムラムラときた彼に押し倒されたいと想像しているわけでもなかった。

ただ不思議なのは、ずっとこのままの関係で、理一郎のほうは平気なのだろうかということだった。わたしは依然として彼について何も知らなかったし——いつまで今のような関係が続けられるものなのかもわからなかった。第一、修道院の誰かに裸の女をモデルに絵を描いているなん

ていうことが知れたら、大変なことになるのではないだろうか？

「なに？何か聞きたいことがあるんなら、遠慮せずになんでも聞くといいよ。君らしくもないな。先週はあんなにべらべらひとりで喋り続けていたのに」

「あれはただの照れ隠しだってば。わかってるくせに」わたしはソファの上に寝そべったまま、重ねた両腕の上に顎をのせたポーズで、そう答えた。「裸で体育座りをしている女なんて、どう考えても間抜けじゃない」

「でもあの絵は君も気に入っていただろう？」

黒の僧服の上に白いスモッグのようなものを着ている彼は、なんだかいかにもインチキ聖職者といった感じだった。

「まあね。ところで聞きたいんだけど、理一郎ってどういう女がタイプなの？わたしがあんたくらいの顔立ちしてたら、それなりに結構モテたと思うし——ユーミンの歌じゃないけど、「守ってあげたい」なんていう女の人何人か、これまでにいたんじゃないの？」

わたしはそっと探りを入れるみたいに、さり気なくそう聞いてみた。

「女になんか、守られたくもないよ」と、彼は珍しくも嫌悪感をあらわにして、絵筆を荒々しく水差しの中に突っこんでいる。「第一、もてたことなんか一度もないな。今はまだましになったほうだけど、いつも青白い顔をした、体育の授業は常に見学してるような男、一体誰が好きになる？」

「ふうん。それじゃあ、こんなふうに考えてみたことはない？もし自分が健康な体をしていたら、今ごろ女なんかよりどりみどりの千人切りだったのになあ、とか。わたし、時々考えるのよ。自分がもし男で結構イケてる容姿してたら、ナンパしまくってやりまくってたんじゃないかって。それである日、嫉妬に狂った女の人に刺されて、松田優作みたいに「なんじゃ、こりゃあ」って叫んで死ぬの。そういうの、ハードボイルドで素敵だと思わない？」

「素敵かどうかはわからないけどね」と、理一郎は笑いをこらえるようにくっくっ喉を鳴らしている。「ユカリの話すことはいつも面白いよ。モデルなんかやめて、漫才師にでもなったほうがいいんじゃないか？」

「そうねえ。それで美人の相方にブスネタで突っこまれるのね。でもそれって、実際は結構キツイのよ。「わたしなんてどうせブスだし」みたいに表明するのって実は、そう言うことによって自分をガードするためなもの。「わたしは自分の身の程をわきまえていて、勘違いなぞしておりません」って、他の人に一度わかっておいてもらおうと、人間関係のほうも結構うまくいくことが多いのよ。特に同性の場合」

「なるほどね。でもユカリはブスじゃないから、もうそんなことを言うのはよしたほうがいい。君はいい人間だよ。だから、悪い人間の言うことには耳を傾けないほうがいいと思う。じゃないと魂が墮落して、結局はそういう人間と同じレベルになってしまうからね」

——そのあと、暫くの間わたしは押し黙ったままでいた。ここ一か月くらい休みのたびにここへきていて思うのは、彼が魂の話ばかりするということがあった。一に魂、二に魂、三四が虚無で、五に魂……うまく説明するのは難しいけれど、とにかくそんな感じだった。全体に、肉体性というものが欠如しているというか、精神性が現実性から乖離しているというか、彼にとっては今五感で感じられるこの世界よりも、絵の中での世界のほうが、よほどリアリスティックなもので

あるらしかった。

「来週、もし晴れたら」と、下着を身に着けはじめたわたしのほうへは目もくれずに、理一郎は絵筆を動かしながら言った。顔の表情のほうは、キャンバスに隠れていて見えない。

「屋外でモデルになってほしいんだけど、いいかな？これで大体、習作の域は出たと思うから、次が本番というか、本命ということになると思うんだ。自然の中で裸になるのは嫌？」

「べつに、いいんじゃない」わたしは自分の本当の気持ちを押し隠すように、努めて冷静さを装おうとした。「どうせこのあたりに、人なんてこないでしょ。時々、修道院のほうから風によって賛美歌を歌う声が聞こえてくるけど……それ以外で人の気配みたいなものを感じたことは一度もないものね。それでもここへくる途中、誰かと会ったらどうしようって、ちょっとどきどきしたりはするんだけど」

「まあ、修道院の誰かと顔を合わせたからって、どうということはないよ。畑や家畜小屋なんかは、修道院の裏の敷地にあるから、表門からの出入りというのは意外に少ないんだ。ユカリはもしかしたら何か誤解してるかもしれないけど、ここの修道院の暮らしはそう苛酷なものではないんだよ。ただ単に基督教の教えについては原始的だというだけで、それ以外では結構自由もきくしね。今日は祈りに専念したいと言えば、祈祷室にある個室で一日中瞑想と称してぼんやりしていることもできる。キリスト教的精神に支えられた個人主義というのか西欧主義というのか、誰かが自分より働いていないといったようなことが原因で揉めたりすることは、まずない」

「へえ……」

わたしは筆をおいて椅子から立ち上がった理一郎のことをじっと見つめた。いかにも精神的な顔立ちをしているというか、中性的で、あまり日本人らしくない顔をしている。フランス人かイタリア人の血でも四分の一くらい混ざっているんじゃないかというような。

「どうかした？」

「ううん、べつに」と、一瞬彼に見とれていた自分を、ごまかすようにわたしは首を振った。「いつもお弁当をむしゃむしゃ食べてるから、よほど粗末な食事しかしてないんだらうなあって思ってたもんだから。なんか少し、安心した」

「もちろん、毎食豪華絢爛とはいかないけどね」理一郎は肩を竦めながら笑った。「第一、ユカリの作る料理があまりにも美味しすぎるんだよ。もし君が僕以外の人間と結婚したら、僕は嫉妬のあまり、相手の男を殺してしまうかもしれない。食べ物の恨みっていうのはおそろしいからね」

わたしは笑おうとしたけど、うまく笑えなかった。それで、彼のそばに近づいていくと、ブーシェの『ソファーに横たわる裸婦』のようなポーズをとっている自分を、鏡の世界をのぞきこむような気持ちで眺めた。

「うーん。素晴らしい出来映えだとは思いますが、やっぱりちょっと美化しすぎよ。理一郎はたぶん……物に対する見方があんまり美しすぎて、醜いものが視界に入ってこないんじゃない？これは肉体的な現実の眼差しで見たわたしの姿じゃないと思う。もしかしたら理一郎の心の目には、こういうふう映っているのかもしれないけど」

「心の目じゃなくて、魂の目だよ」と、理一郎は訂正した。「物質界で起こることはすべて、そ

れ以前に霊的世界で起こってからこちら側にもたらされるんだ。だからたぶん三年か五年もすれば——ユカリは絵のと通りの女になっているだろう。それまで僕もなんとか長生きしたいものだと思うよ、本当に」

わたしは隣の理一郎のことを、心配そうな眼差しでじっと見上げた。彼の心臓のあたりに手をあて、それからその鼓動の音を確認するように、顔と耳をそっと押しあてる。

「冗談を言ってるんじゃないわよね？わたし最初、あなたがからかっているんじゃないかって思ったのよ。でも本当に……現実に、あなたは医者からそうあまり長くは生きられないと言われてる。そうなのね？」

「そうだよ」と、理一郎は力強くわたしのことを抱きしめながら肯定した。「というより、ここまで成長したこと自体が奇跡だと言われてる。＜神は癒し人＞という証しを、僕はこれまで何度人にしたかわからないくらいだ。ユカリはヒーラーっていう言葉を知ってる？」

「うん。何かで聞いたことある」わたしは自分の記憶をつま繰りながら、絵の具の匂いの染みこんだ男の胸に頬をすり寄せた。「その人が病人の患部に手をかざして祈ったりすると、病気が直っちゃうんでしょ。そういう牧師さんがいるっていう話を、本か何かで読んだような気がする」

「僕はカトリックだから神父だけだね」と、理一郎はわたしの頭の上に顎をのせながら笑った。「小さい時から、僕にはその能力があった……といっても、誰でも全員治るというわけじゃないけどね。その病気で死ぬことが定まっているような人のことは直せないんだ。それに、ちょっとした骨折のような場合でも、癒せる人と癒せない人がいる。それが何故なのかは僕にもわからない。おかげで僕は神童扱いされて、カトリック教会のほうにも重宝がられたけど、皮肉なことにはね、自分の病気だけはどうしても癒せなかったんだ」

「意地悪なのね、神さまって」わたしはキリスト教の神というより——いるのかいないのかわからない、汎神論的な存在の神に向かって、突如怒りを感じた。「でもきっと理一郎は長生きするわ。だってあなたはわたし以上に……ずっといい人間だもの」

「本当に、そう思うの？」

彼がそう言ってわたしの体を離れた時、冷たい悪魔のような微笑みが、理一郎の顔には浮かんでいた。それはこれまで一度も見たことのないような、別の男の顔だった。

「え、ええ……」

なんとなく気まずくなって、わたしはそのままさりげなく彼から離れると、陶器の水差しを引っくり返しそうになりながら、隣の部屋にショルダーバッグをとりいった。そして鞆の中から櫛をとりだして何度か髪を梳かしてから、水車小屋をでようとした。

「それじゃあ、また来週ね」

アトリエのほうをのぞきこんで、わたしが最後にそう声をかけた時、理一郎はいつもの彼に戻っていた。西日の差しこむ窓辺から振り返った彼の顔は、優しい、たとえて言うなら野生動物の鹿かうさぎかりスのような、あどけない汚れのなさで満ちていて、思わずわたしは眩しくなっただけだった。

第7章

友彦さんが言っていたように、わたしが理一郎の前で裸になるようになったのは、自然の流れとしてある意味当然のことだった。彼の強い眼差しに促されたというよりも、自分でそうしたいと思った気持ちのほうが強い。そして彼はいずれそうなることがわかっていて——何も言わずに黙ったまま、ただその時がくるのを待っていたというわけだ。

もちろん、最初のうちは照れや恥じらいのようなものはあった。でもだんだんそれが当たり前のようになっていき、モディリアーニの『座る裸婦』や『腕を広げて横たわる裸婦』にも似たポーズをとるのに、なんのためらいも感じないどころか、時々疲れて、そのまま眠ってしまうことさえあるくらいだった。

本当ならもうちょっと、官能小説的に「彼の熱い視線がわたしの肌の上を滑るたび、甘い官能の疼きと悦びが……」とでも書きたいところだけれど、理一郎の瞳には眼差しで犯すようなところはまったくなかったのだから、彼の芸術家としてのプロ根性はなかなかのものだったとっていいのではないかと思う。

よく晴れた、気温が三十度近くにもなったその真夏日、わたしはガウン一枚だけを着て水車小屋の外へでると、理一郎の案内で、林の奥、小川の流れるほとりの草むらの上で横になった。そしてガウンを脱ぐと靴を蹴っ飛ばすようにして脇へやった。

頭上には大きなハルニレの樹が葉をさやさやと風にそよがせ、小川はさらさら歌い、あたりにはピンクや紫のルピナスが群れをなして咲いていて、とても美しかった。空を見上げると帆を膨らませたような白い船が幾艘も航行していくのが見える——わたしは自然とひとつになる喜びを感じて、その時初めて強い官能性に目覚めたように、うっとり夢見心地になった。

理一郎はイーゼルにキャンバスを置くと、珍しく丹念に下絵から描きはじめている。これまではずっと一発描きのように油絵の具をそのままキャンバスにのせていたのに、いつもとはまるで勝手が違うようだった。そしてわたしは彼が「これが本命だ」と言っていたのを思いだして——にわかに、自然の与える官能美の世界から、現実へと引き戻されるのを感じた。

(ということはつまり、この絵が完成したらわたしと理一郎は……)

そのまま別れるか、もっと先の段階へ進むかの決断をしなければならなくなるだろう。もっと先の段階？ どうして今それを考えなくてはいけないのだろう？ 今この瞬間こそが永遠そのもののように美しいのに？

わたしはその日、珍しくじっと理一郎の顔を見つめながら草むらの上に横たわっていた。でも彼の眼差しはわたしの視線とはほとんど交わることなく、もっとその奥にあるものを凝視しているかのように、すべての問いかけに答えるのを拒否していた。いつもなら、「何か聞きたいことでもあるのかい？」と、そう言ってくれるのに。

そのまま、二時間ほどが経過しただろうか。気がついたらわたしはそよ風の中にひそむ睡魔の手に委ねられて、快い眠りの中にいた。シシリー＝メアリー＝バーカーが描いたような花の精が、ルピナスの花の横に立っているのが見える……いいや、そんなまさか！と思った時、目が覚めた。

「お疲れさま」

見上げると、隣に理一郎がいつもの黒い僧服姿で座っていた。わたしは体の上にかかっていたガウンを着ると、たたたと走って行って大きなキャンパスの前にまわった。顔の表情など、細かいところはまだ描かれていなかったけれど、それは今のところ彼の肉体の目が捉えたそのままを描いているようだった。これまではいつも、背景には本来そこにはないもの——たとえば、宗教書の詰まった本棚や、鸚鵡のいる鳥籠、季節外れの花が活けられた花瓶など——が描きこまれていることが多かったから。あるいは実際には同じポーズをとったわけではないのに、わたしが胸を隠すようにして開いた本を読んでいたりだとか——半分、理一郎の面白半分の空想が混ざっている場合がほとんどだったのだ。

「この絵は、描きあげるまでにかなり時間がかかるよ。どんなに早くても最低一か月くらいはね。夏が終わる前までにはなんとかと思ってるんだけど」

「そう」と、わたしはほっとしたように微笑んだ。一夏の恋で終わるかどうかは、その時にまた考えればいいことだと思った。「それよりお腹すいちゃった。敷物しいて、お弁当にしない？理一郎もお腹すいたでしょ？」

「もちろん」

彼は待ってました、というように手を擦りあわせながら頷いている。実をいうと今日は少しおらずに力を入れてきたのだ。理一郎の好きな手作りざんぎやエビフライにオムレツなど、その他食後のドーナツに至るまで、ちょっと面倒だったけど、スーパーの惣菜のお世話にはなるたけならない品揃えだった。

「幸せだねえ」

食後にお茶をすすりながら、理一郎はしみじみしたようにそう言った。これが和久あたりなら、「何じむさいこと言ってんのよ」とでも言って小突いてやるところだけど、彼があんまり幸せそうに目を細めているのを見て、わたしはただ同意することしかできなかった。

「理一郎の食欲には、本当に呆れちゃわね。重箱二段分平らげておいて、よく十個もドーナツがお腹に入るもんだわ」

「そうやってバランスをとってるんだよ」そう言って理一郎は笑った。「僕は一週間くらいなら、断食しても平気な人間なんだけど、そのかわり食べられる時には食べないと損だって、そう思ってるんだ」

「それは女の人もってこと？」

理一郎がびっくりしたように隣のわたしのことを振り返る。そしていかにも愉快そうに声を上げて笑った。

「凄いこと聞くね、仮にも聖職者に向かって。前にも言っただろう。僕は小鳥の心臓だから、女の人とセックスなんかしたら、そのまま腹上死だよ」

「はぐらかさないで」わたしは珍しく真剣になって言った。「このガウンだって——袖を通したのは何も、わたしが初めてってわけじゃないんでしょう？べつにいいのよ、それならそれで。その女の人がどんな人だったのかなんて聞かない。でも理一郎の口からは、嘘だけは絶対聞きたくないの」

「参ったな」

君はそんなことを聞く娘じゃないと思っていたのに、という眼差しで見つめられて、一瞬わたしは怯んだけれど、負けるもんかと思って強く彼のことを見つめ返した。

「そのガウンはね、僕のだよ。時々僕は修道院の宿舎へは戻らずに、あそこで絵を描いて夜を過ごすんだ。そうだ、今度——あの絵が完成する頃にでも」と、そう言って理一郎はイーゼルに立て掛けられたキャンバスのほうを見た。現実の世界で肉体を持つわたしよりも、絵の中のわたしのほうが大切だ、とでもいうように。「一度、泊まりにおいで。そうしたら僕がどういう人間か、よくわかると思うから」

「……本当にいいの？」

わたしはためらいがちに、すぐ隣の彼のことを見上げた。

「もちろん。もし今ここで、契約書にサインをするつもりがあるならね」

「契約書？」と、わたしは鸚鵡返しに聞いた。

「わたしはあなたに首から下を許しますっていう、契約書のサイン」

あ、とわたしが思う間もなく理一郎はわたしの唇にそれを重ねていた。軽く唇と唇が触れあっただけの、神聖な口付け。

「それじゃあ、そろそろ続きにとりかかろうか」

理一郎は薄汚れた絵の具だらけのスモッグを手にする、僧服の上からそれを着て、再びキャンバスの前に立った。そのあとわたしは、生まれて初めての甘いキスの余韻にぼうっと浸っていたので、眠気が差すようなこともまったくなく、あっという間に時間は過ぎていった。

「ねえ、一言いってもいい？」

一か月後に絵が完成間近となった時、わたしは水車小屋のアトリエで、とても自分自身がモデルとは思えない裸の女を指差して、そう聞いた。

意見があればどうぞ、というように理一郎は頷いている。

「これ、一体だれ？ラファエル・コランの『^{フロリアル}花月』みたいな美人じゃない。理一郎、あんた確か言ってなかったっけ？ムンクの『思春期』っていう絵の少女にわたしが似てるとかなんとか... ..確かにね、あの絵の女の子とはわたし、髪型とか、胸があんまりないとか、似てるかもしれないわ。でもねえ、いくらなんでも流石にこれはデフォルメしすぎなんじゃないの？」

「そんなことはない」やけに自信たっぷりに、理一郎はそう言い切った。

窓からは茜色の夕陽の光が、その日一日と別れを惜しむように、強く差してきている。そしてサフラン色の空と溶けあったオーロラを思わせるその色彩は、杉の樹や檜の樹を彩って、窓辺の景色を美しい一枚の影絵のように見せていた。ピー、口口口口.....と鶯の鳴く声が、夕空を飾るように響いてきている。

「第一、なんでそんなふうに怒った口調で言うかな。それとももしかしてユカリは、ロートレックかアンソールの絵の登場人物みたいになりたかったとか？そういう描き方もまあ、できなくはないけど——どっちにしても君が満足するとは思えないな」

出会ってから初めて、お互いの間に剣呑な空気が立ちこめたその八月も末の暑い水曜日——もしかしたらわたしは少し、ナーバスになっていたのかもしれない。何故ってわたしはその日、初めて水車小屋で一夜を明かすことになっていたから。喧嘩でもすればそのことを理由に逃げられるかもしれないとの思いが、無意識のうちにも働いてしまったのかもしれない。

「とにかく、ユカリがなんと言おうとも、僕はこの絵の出来映えに満足してる。修道院のほうにも僕の描いた宗教画が何枚か飾ってあるんだけど、その中では聖女チェチリアがこれまで描いた女性の最高傑作だった。でもこの絵のほうが、遥かに素晴らしいよ——何故ってユカリは現実に肉を持って存在していて、今こうして目の前にいるんだから」

（まったく、なに言ってんだかなー、この男は）と思いつつも、惚れた弱味というべきか、わたしは照れたように前髪をかき上げて、小さく溜息を着いた。

理一郎はといえば、自分が描いた絵の女性にうっとりするように、見惚れている。果たして彼が現実に存在しているわたしと、絵の中の彼女とどちらが好きなのか——それは疑問だった。彼は一筆一筆繊細なタッチで、キャンバスそのものを愛おしむように丁寧にその絵を仕上げている。わたしは裸のまま再びソファの上に横たわると、彼の目が現実の自分という女に注がれていないことを不満に感じた。何故って——その瞬間、わたしにはわかってしまったからだ。彼はわたしの中にある、〈何か特別なもの〉を具現化することに成功したので、もはやそれ以外の残りのもの、つまり汚らわしい肉の重みを持つ女などにはまるで興味がないのだ。今日ここへ泊まりにこいと言ったのもおそらくは、それこそ〈最後の仕上げ〉としてその残りのものを処分するためなのだろう。

(べつにいいわよ、それならそれで)

わたしは自分の怒りに正当性を感じて、キャンバスの向こうの理一郎のことを睨みつけながら考えた。もはや彼はわたしのことなど見てもいない。赤い蠟燭の放つ光の輪の中で、ただせつせつと絵筆を動かして、美の女神のために奉仕しているだけだ。まるで、あなたのためなら命を捨てることさえ惜しくない、とでもいうように。

(このガウンも、自分のものだなんて言ってたけど——本当はきっと、そうじゃないんだわ。これまでも何人か、わたしと同じような犠牲者がいて、最後には今のわたしと似たような気持ちになって、彼と別れることになったんじゃないかしら)

わたしはソファの背もたれにかけておいた薄いクリーム色のガウンを手にとると、それを着るために上体を起こそうとした。理一郎はすでにもう、わたしというモデルの存在を必要としていなかった。それなのにこれ以上、一体なんのために裸でいる必要がある？

そうわたしが悲しく思った時、深緑色のカーテンの奥のほうで、ガタリと何か物音がした。続く人の揺らめくような気配——間違いなくそこに誰かがいると、わたしはそう直感した。

「……理一郎。もしかして、わたしたちの他に誰か、ここにいるの？」

わたしはキャンバスの向こうの彼に向かってではなく、深緑色のカーテンと、その隙間にある深い闇に向かってそう訊いた。

「ここには、君と僕以外<誰もいない>」と、理一郎は即答した。でも何かが変わった。あれは決してネズミや風の音というわけではなかった。明らかにわたしが体をソファの上に起こしたから——それで驚いてよろめいたといったような、そんな気配だった。

「こんなこと、聞きたくないけど」わたしは勇気を振り絞るように、声を大きくして言った。ガウンで裸の体を隠しながら、その手が震えるのを感じる。「まさか、わたしがいつもここにいる間、誰か他にいたなんてこと、ないわよね？」

「そんなことはないよ」

それは奇妙に抑揚を欠いた声だった。彼のほうを振り返っても、その顔の表情はキャンバスに隠れていて見えない。どういうつもりなのだろうとわたしは思った。まさか、彼が今日ここへこいと言ったのは……。

テーブルの上の赤い蠟燭が、ジジ、と微かに音を立てたような気がした。そしてわたしがそのどこか神聖さをたたえた光の輪に、一瞬の間捉えられそうになっていた時——緞子のような厚いカーテンが開いて、闇の中から背の高い男が現われた。

「……理一郎っ！」

わたしは驚いて叫んだ。それは確かに理一郎本人だった。でも彼は、今キャンバスの前にもいるのだ。その証拠に、わたしの叫び声を合図とするように、理一郎は椅子から立ち上がった。同じ顔がふたつ——わたしは混乱して、ふたりの人間のことを交互に見やった。そして突然闇の中から現れたようなもうひとりの理一郎は、わたしのその混乱を利用するようにソファの上へ重くのしかかってくると、わたしの足を容赦なく開いて乱暴に犯したのだった。

そのあとのことでわたしが覚えているのは、僧服姿の理一郎が悪魔のような微笑みを浮かべて、わたしが犯されるのを見ていたことと、おそろしく力の強い男が自分のことを征服したという

、そのふたつのことだけだった。それと、印象に残っていることがもうひとつ……その男の鼠色のシャツには強い煙草の匂いが染みついていたということだけだった。

当然ながら、理一郎は煙草を吸わない——いや、もしかしたら隠れて吸っていたという可能性もなくはないけれど、少なくともわたしは彼が煙草を吸っているところを見たことはない。

ということはやはり、彼は別人だったのだろうか？

そんなふうに思い至ったのは、帰りのバスの中でのことで、わたしは処女を喪ったその翌朝、誰もいない水車小屋でひとり目覚めたあと、なんともいえない恐怖のあまり、すぐに走ってそこをでたのだ。ポプラ並木の下、茶色い道を走っている途中で、修道院から荘厳な鐘の音が鳴り響いてきたのを覚えている。でもわたしは振り返らずに、息が切れるまで走り続け、始発のバスに乗りこんだのだった。

不思議と、こんなのもてあまらだとか、そんな気持ちはわいてこなかった。ゆうべ乱暴に犯された、血の滲むような痛みのことを思っても、涙もでない。

ただわたしは夏が終わると同時に、自分の初めての恋が無惨に散ってしまったのを悲しく思ったという、それだけだった。

(やっぱりあれは、理一郎とは別人だったのよね？)

続く虚しい秋と冬という季節の間、わたしはあの夜、自分の身に起こったことを反芻しては、そう自問自答し続けた。

肩幅の広さや腕力の強さだけを考えてみても、あれが理一郎と同一人物だとは、わたしにはとても思えなかった。そう考えると、物理的には——あの男は理一郎の双子の兄か弟、あるいはとてもよく似た兄弟ということになる。でも魂の直感とも呼ぶべき何かが、わたしのそんな理性的な論理にいつもひびを入れるのだ。何故って——絵を描く理一郎は精神の化身そのものといった感じだったけれど、対して、もうひとりの彼は、まるで肉体の化身とでも呼ぶべき存在で——その違いについて考えはじめるとわたしはいつも、頭の底が闇色をした液状の、混沌の沼と化していくのを感じた。

そして思う。論理的整合性なんて、なんの意味も持たないと。今日の前にあるのはただ、渴ききったような現実感だけだ。心臓を絞って一滴の血もでなくなったあのような、虚しい感覚……でも次期にこの感覚にも慣れるだろう、わたしはそう思った。自分は強い人間だから、このくらいのことは耐えられる、そう過信した。まさか自分が失恋したくらいで——処女を喪ったくらいで自殺未遂をはかるだなんて、思ってもみなかったのだ。

第9章

それから一年ほどが過ぎて、再び六月がやってきた。わたしは今も自分の手首の傷痕を見る度、随分馬鹿なことをしたものだ、そう感じる。あの時、もし和久が偶然、わたしのアパートへやってこなかったら——発見がもう少し遅れていたら——死んでいたかもしれないと医者は言った。

わたしが運ばれたのは救急病院だったわけだけど、その時の担当医師の冷たさときたら、わたしには今も忘れられないものがある。交通事故などの場合は仕方ないかもしれないが、こういう感傷的な自殺未遂は実にはた迷惑だと、そう言っているかのような診察態度だった。もちろん、医者にだって腹の虫の居所が悪い時くらいあるだろう。でもこういう場合は患者の心の内を慮ってせめて優しいふりくらいしろよ、わたしはそう思った。

看護師たちが「失恋なんじゃないかしらねえ」なんて、わたしが寝ているものと思って噂話をしているのも気に入らなかったし、わたしは翌日にはその病院を退院することにした。そして再び友彦さんと和久の家に厄介になることになったわけだ。

仕事のほうは、三か月くらい休んでから、再び復帰した。でも誰も何も言わなかった。友彦さんが「ちょっと体の調子を崩してね」なんて説明してくれていたらしいけれど、今にして思えば手首を切る前から、わたしの様子は傍から見ていても少しおかしかったと思う。体は骸骨のように痩せ細り、目はどこか虚ろでぼんやりとし、それでいながら接客だけは異様なほど明るかった。

三か月休んで再び職場に戻った時、ようやくこれで平常復帰ができた、わたしはそう感じた。誰も特に「病気はどう？」なんて聞くこともなく、すべてが以前と同じままだった。たぶん、わたしはその時生まれて初めて、世間一般の赤の他人の優しさというものを身に沁みて感じたような気がする。何故って、精神というか心というか、魂にまだ血がこびりついているような時——わざわざ「血がついてますよ」なんていう指摘を受けたい人は、誰もいないだろうからだ。

綾香はその後、オペラを見にいった時に知りあった、イタリア人の精神科医と結婚することになった。アルバン・ベルクのオペラ『ルル』——綾香は本当はその時、当時つきあっていた大学の教授とそのオペラを見に行く予定だったのだけれど、彼のひとり息子が交通事故にあったとかで、急遽ひとりで見に行くことになってしまったのだ。その綾香の通う大学の教授とは不倫だったので、綾香はその日『ルル』を見ながら、「そろそろ別れ時かしらねえ」なんてことを考えていたらしい。

そしてオペラが終わった時には、仏文科の教授と別れる決意をしていたわけだが、彼が座る予定だった席をひとつ置いたところに座っていた髭もじゃらの外国人が、突然綾香に話しかけてきたというわけだ。

「お嬢さん、ちょっとよろしいですか？」と、その晩年のヘミングウェイを彷彿とさせる髭もじゃら男は流暢な日本語で言った。「あなたはこのオペラにでてくる『ルル』にそっくりだ。ようするに、男を破滅に導くファム・ファタール（運命の女）というわけですな。ところであなた

はルー・サロメという女性を知っていますか？ニーチェがプロポーズをしたことで有名な女性なのですが」

「一応、知ってますけど」と、綾香は男の慇懃無礼さに腹を立てながら答えた。「でも、初対面のあなたにそんなことを言われる筋合いはないと思います」

「まあ、そう怒らずに。もっとも、怒った顔もキュートですけどね」

綾香はそのあと、このイタリア男の軽いノリにつきあわされて、一緒に食事をしに行くことになったという。だがその時、ススキノにある某イタリアレストランのテーブルの一角は、修羅場と化したらしい。

「あなたは男のことをみんな馬鹿だと思っている、そうでしょう？」

名前をジュゼッペ・ゲルネルディというその四十三歳の男は、貴腐ワインの芳香を楽しみながら、まず最初にそう言った。

「だったらなんなの？第一、男なんて本当にみんな馬鹿ばかりよ。どんなに少なく見積もっても、全人類の約90%以上はね」

「ふむ」と男は頷き、「このワインはトカイ産なんですよ」そう言って綾香にもワインを勧めた。

「じゃあ、あなたは残りの10%の男と結婚すればいいわけだ。実をいうとわたしは、数少ないその10%に当たる男であると、そう自負しています。どうですか？ひとつわたしと賭けをしてみませんか？」

「賭け？」

ワインや貝料理がどんなに美味しくても、騙されるものかとばかり、綾香は男を睨めつけた。「そうです。もしあなたがわたしのことを全人類の90%を占める馬鹿男と認定したら、その時はわたしの負け。でも残りの数少ない10%の側の人間であると認めたら——賭けはわたしの勝ちです。そしてわたしは景品として、あなたの身柄をいただきます」

「人を物扱いしないでよ。第一、わたしが勝ったら何をくれるわけ？ヴィトンのバッグかシャネルのスーツでも買ってくれるの？そんなのあんまり一方的じゃない。メリットなんてなんにもないわ」

「ありますとも」と、あまりに日本語が流暢すぎて、どこか胡散臭く感じられるイタリア男は言った。「本当に本物の恋を知ることができるというメリットがね」

その後、ふたりの間には奇妙な火花が散り、世界の文学・哲学・芸術全般について、一時間ばかり熾烈なやりとりが続いたという。

「ユキオ・ミシマの代表作は？」

「一般的なところで言うと『潮騒』や『金閣寺』ですか。でもわたしは個人的に、彼の書いたものの中では『豊饒の海』が一番好きですね」

「江戸時代の画家、尾形光琳の残した国宝」

「『燕子花図屏風』、『紅白梅図屏風』」

「仏教の五戒」

「不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒」

……といった具合に。そして綾香は最後に、彼が日本人ではなくイタリア人であることを考慮して——このジュゼッペ・ゲルネルディという男の申し入れを受けることにしたのだった。

「でも交際してたったの二か月で結婚とはねえ。しかも国際結婚。さすが綾香というか、なんというか……」

わたしは鴨々川沿いにあるホテルのスイートで、六月も末のその日、一番の親友と語り合っていた。彼女はあと一週間もすれば婚約者の精神科医と一緒に、イタリアのミラノへ旅立ってしまうのだ。言ってみればこれは、女同士の最後の夜——というわけで、記念にふたりで熱く一晩中語り明かそうということになったのだ。

「時間はあまり関係ないのよ。だって二三次デートしただけでわかっちゃったもの。ああ、わたしはぶん、この男と結婚するなって」

「そっかあ。なんだか羨ましいな。式のほうは向こうで挙げるんでしょ？」

わたしたちはダブルベッドの上にふたり寝転びながら、ナイトスタンドの淡い光に照らされて、互いに向きあったり、天井を見上げたりしながら、夜の闇の中へ話し声を滑りこませた。

「できれば由架理にもきてほしいって、そう思うんだけど。飛行機代とか、そんなのはわたしが持つから」

「そんなの駄目よーう」と、わたしは冗談で、隣の綾香に抱きつきながら言った。「あたし、イタリア語はおろか、英語もろくに喋れないのよ。空港でスリにあって泣きを見るのがオチだつてば。第一、出席者のほとんどが外人さんなんですよ？そんなの、気後れしちゃって絶対だめよ」

「んー……どうしても駄目？」

綾香の長い黒髪からは、シャンプーのいい香りがした。さっき部屋に備えつけの豪華浴場で、互いに背中を流しあったのだ。彼女は女のわたしが惚れぼれするくらい、いい体つきをしていて——奇妙なことに、わたしは彼女の婚約者のジュゼッペさんに、思わず嫉妬に近い感情を抱いてしまったくらいだった。

「もちろんわたしだって見たいわよ、綾香の花嫁姿。でも流石にイタリアは無理よ。そのかわり、写真送って。我が家の家宝にするから」

「大袈裟ねえ」

綾香はくすくすと幸せそうに笑った。その笑顔がなんだかととても眩しくて、わたしは思わず天井を見上げた。スイートルームだけあって、天井にもウィリアム・モリスの壁紙を思わせる、素敵な花とりボンの模様が一面に描かれている。

わたしにとって綾香はずっと、手の届かないお嬢さまのようなものだった。何故わたしとこれまで七年以上も友達でいてくれたのか、不思議なくらいの。彼女が<運命の相手>と思える男性と巡りあって、その人と結ばようとしていることはとても嬉しい。本当に心から嬉しい。でも翻って我が身のことを思うと——少しばかり複雑な心境でもあった。わたしだって理一郎と、たったの二か月の間ではあるけれど、彼女と同じように<運命の相手>と巡りあったという感触を感じながら過ごしたのに……その結果はあまりにも酷すぎた。

そのあと、わたしたちは中学時代にまで話を遡って——四時間ばかりも語り明かしただろうか。やがて深夜の二時近くにもなり、綾香の静かな寝息が隣から聞こえた頃、わたしは彼女に背を

向けて、ひとり考えごとの世界に耽った。

実は、綾香とお風呂で背中を流しあっていた時、彼女に言われたのだ。「あれ？由架理、背中の三日月型の痣がないよ」……わたしは自分でも鏡に背中を映して見たが、彼女の言うとおりに、本来そこにあるべきはずのものはなかった。

「えーっ！ウッソー。何よこれ、なんでなんで？」と、わたしは茶化してその場をごまかしたけれど、本当はわかっていた。理一郎のあの、わたしの背中への痣に対する異常なまでの執着ぶり……こんなふうに考えるだなんて、少し頭おかしすぎだったかもしれないけれど、それでもやっぱりこう思わずにはいられなかった。

（彼が、＜絵の中の世界＞へわたしの三日月型の痣を持っていったのだ）と。

わたしはその夜、隣で幸せそうな親友の寝息を聞きながら、ひとり忍び泣きに暮れた。その中には少し、無二の親友と遠く離れなくてはならないことへの悲しみも入り混じっていたには違いないけれど——それより、理一郎の自分に対する奇妙な愛し方のようなものが初めて理解できて、胸に悲しみが溢れた。

（もしかしたらわたしはあのあと、もう一度彼と話しあうために、あの水車小屋へいくべきだったのだろうか？いや、そうじゃなくて——やっぱりこれでよかったのだ。わたしは自分が犯されている間、涙目になって、訴えかけるような眼差しで「何故？」と彼に問いかけた。でも理一郎は終始一貫して、その問いかけに答えるのを拒んだのだから。今なら、少しだけ彼の気持ちがわかるような気もする……あの悪魔のような冷笑の裏側には、もしかしたら嫉妬の気持ちが隠されていたのかもしれないと）

自分の処女を奪った人間が本当は誰だったのかなんて、どうでもいいことなのかもしれない、その時初めてわたしはそう思った。彼の双子の兄であれ弟であれ、よく似た兄弟であれ——とにかく彼は、自分に近い人間にそれをさせたのだ。だからわたしも、あれが理一郎本人だったと思って、心の中に大切な恋の思い出として、あの二か月間のことをしまっておけばいいのだ。

わたしは確かに、心から信頼し愛した男に自分の処女を捧げたのだと……。

第 11 章

だが運命は突然、わたしがまったく予期しなかった方向から変わりはじめた。わたしが翌朝、ホテルのロビーで綾香が清算をすませるのを待っていると——なんと、理一郎その人がアールヌーヴォー調の螺旋階段から下りてくるではないか！

「……理一郎っ！」

彼があまりにも涼しい顔でわたしの目の前を通りすぎようとしたので、思わずわたしは彼の首根っこを掴んでいた。

「あんたっ、よくもわたしにあんなことしておきながら……けろっとして無視できるもんだわねっ！」

理一郎は、なんのことやらまるでわからないという顔をしていた。そしてわたしのほうでもハッと気づいた。理一郎には右目の下に泣きぼくろがあったけれど——この男は、左の下にそれがある。ということは、つまり……。

「あの、わたし共の従業員が何か？」

フロントのほうから、彼の上司らしき年配の男が姿を現すと、わたしはなんて言ったらいいのかわからなくて、口籠もった。よく見ると、理一郎のそっくりさんは客室係の制服を着ているし、清潔な真っ白いシーツを何枚か腕にかけている。

「申し訳ありませんが、お客さま。彼は聾者なのです。もし御用事があれば、わたしのほうで通訳いたしますが？」

「そう、なんですか」

わたしはあらためて驚くとともに、理一郎によく似た男のことを見上げた。彼のほうでは、さっぱり事態が飲みこめないといったような、困惑した表情を浮かべたままだ。

「あの、この人、わたしの知ってる人によく似てるんです。もしかしたら兄弟かなって、そう思ったもんですから……」

ロマンスグレイの上品そうな老紳士は、手話で彼と数分会話を交わすと、再びわたしのほうに向き直ってこう言った。

「黛くんには確かに、双子のお兄さんがおられるそうですよ。一緒に同じ孤児院で育ったということですが」

やっぱり！わたしはその時、雷に打たれたようになって、もう一度理一郎の双子の弟のことをじっと凝視した。自分がレイプした被害者のことを思いだせないのだろうか？彼は相も変わらず涼しい顔をしたままだった。

「わたし、お兄さんのことで彼に聞きたいことがあるんです。筆談で構いませんから、仕事が終わったあとにでも少し時間をとってもらえないでしょうか？」

すると、このホテルの支配人でもある老紳士は寛大にも、理一郎の弟に「今日は早退しなさい」と言った。わたしの切羽詰まったような表情を見て、よほどの事情があるに違いないと直感したからなのか、それともそこはかたなくロマンスの香りを感じて、聾者の彼に同情してのことなのか、そこらへんのことにはよくわからない。

わたしは事の成りゆきを不思議そうに見守っていた綾香に、「あとでまた説明する」とだけ言

ってその場で別れ、ロビーのソファに腰かけながら理一郎の弟がやってくるのを待った。

ホテルの庭では折しも、結婚式の予行演習なのかなんなのか、ウェディングドレス姿のモデルみたいに綺麗な花嫁さんと燕尾服姿の花婿さんが写真撮影しているところで、わたしは美男美女カップルのそのふたりがとても羨ましくなった。自分が家庭環境というものにあまり恵まれなかったせいか、わたしには結婚願望というものはない。子供なんて生んでもうまく育てられるかどうかわからなかったし、セックスそのものに関しても——性欲というものがまるでないというわけではなく、この先一生そんなことがなくても生きていけると自分では思っていた。

(だから、もし理一郎が心臓病のためにそれができないと言ったとしても、わたしは平気だっただろう。でも彼には信じることもわかることもできなかったのだ。あれだけ、わたしの精神性のようなものを絵の中に奪っておきながら——最後には肉体的な現実の問題をわたしを傷つけることで処理しようとしたのかもしれない)

わたしがホテルの花壇の、あじさいの花の鮮やかな青さに目を留めていると、誰かが背中を叩いた。振り返ると、グレイの半袖のシャツに黒のジーンズという格好の理一郎の弟が立っていて——彼はホテルの出口、回転扉のほうを指さしていた。

(あの時と同じ格好だわ)

この偶然の一致、ユングのいう ^{シンクロニシティ} 共時性 のようなものに戸惑いを覚えつつもわたしは、彼と連れだってホテルを出、すぐそばの喫茶店に足を向けた。ちょうど理一郎が本屋でわたしに声をかけたのも、今日のような雨催いの日で——降りそうでいてなかなか降らなそうな鉛色の空を見上げ、わたしは今朝ホテルのTVで見た天気予報のことを思いだしていた。

(一日中曇りで、ところによっては一時雨っていったっけ。なんとなく、喫茶店で彼と話しているうちに、雨が降ってきそうな予感がするけど.....まあいっか。雨に濡れて歩くのも、嫌いじゃないし)

理一郎の弟は、時々手話で話そうとしながらも、その度にわたしには通じないのだと思い返して、両方の手を空中分解させていた。そして横断歩道を渡った先にある、大きなゴールデンレトリバーが店番をしている喫茶店まで来た時——デイパックからメモ帳とボールペンを取り出して、彼はこう聞いたのだった。

『本当に、ここでいい?』

その文字にはなんとなく、彼の人柄のようなものが反映されていた。もやしみたいに細くて、几帳面に角張った文字.....わたしは客引きをしているゴールデンレトリバーのマナちゃん(と首輪に名前があった)のよく手入れされた艶やかな毛並みを撫でつつ、態度でここで構わないということを示した。

こんな愛らしい、潤んだ瞳の犬にモーションをかけられたら、誰だってこの店に入らずにはいられなくなるだろう。

でも、彼の勤めるホテルの斜め向かいにあるその喫茶店では、手話以外の会話が基本的に禁止されていて——働いている従業員もみな、マスターの奥さん以外は聾者の方だった。

どうやら彼はここへよく来るらしく、小ぢんまりとした店内に十数名いた客たちのほとんどと顔見知りらしかった。彼らと手話で軽く挨拶したり小突きあったりしてから、店の一番端っこ、

カウンターから離れていて表通りに面している席に戻ってきた。

そして可愛いウェイトレスの女の子とも、わたしには理解できない言語で会話をし——彼女は汚れない雪を思わせる純粋な微笑みを頬に浮かべていた——自分だけ先に何か注文したみたいだった。これは直感だけど、たぶんコーヒーのような気がする。

『このオススメメニューは、コーヒーゼリーだよ。感動的に美味しいんだ』

「へえ」と、思わず声にだして言ってしまってから、わたしはいかにも手作りといった感じの、可愛らしい布製のメニューブックを開いてみた。

朝のバイキングで綾香とお腹いっぱい食べていたので、そんなに重いものは食べたくなかった。それで、彼のいうコーヒーゼリーを注文してもらうことにした。

店内のほとんどの人間が非言語コミュニケーションを交わす中で、なんだかわたしだけが浮いているように感じられるというか、異邦人として別の国に紛れこんでしまったような、そんな奇妙な錯覚があった。理一郎の弟はというと、そんなわたしの戸惑いを知ってか知らずか、デイパックの中から大学ノートを一冊とりだして、『兄さんのことで質問があればどうぞ』と最初の一行目に手早く書きこんでいる。

——あなた、名前なんていうの？

『黛 零一郎といます』

——レイイチロウ君ね。で、聞きたいんだけど、あの人今どこで何してるの？今もあの水車小屋で、わたし以外の犠牲者をモデルにしてるってわけ？

わたしの書いたこの文章を読むなり、明らかに零一郎は困惑した様子だった。戸惑いというよりも嫌悪の情さえ読みとれる顔をして、暫くの間顎に手をあて、考えこむようにしている。

『それは、どういうこと？兄さんは一年前に——あのあと間もなくして亡くなったんだ。心臓発作でね』

今度はわたしが驚く番だった。心臓発作？しかも<あのあと>ということは、こいつやっぱり覚えているんじゃないか！

それにも関わらず今まで汗ひとつ見せずに涼しい顔をしていたのかと思うと、わたしはふつつつと怒りがこみ上げてきて、アンティーク調の茶色いテーブルごしに、思いきり彼のことを睨みつけてやった。すると零一郎はわたしの側からノートを自分のほうへ戻し、少しの間考えこんでから、ボールペンでこう書きこみをした。

『誤解しないでほしいんだけど——君があ那时的人だと気がついたのは、支配人と話をして、スタッフルームに戻る途中でのことだったんだ。最初は本当に君が誰か、まるでわからなかったんだ。それで廊下を歩きながら一生懸命思いだそうとして、ようやく気がついた。裸の時と服を着てる時では、全然印象が違うものだね』

よくもじゃあじゃあと……もしもこいつの耳が聞こえていたとしたら、なんのためらいもなく「この、性犯罪者！」と叫んで拳骨でぶん殴ってやるのに。理一郎の弟はまるで、自分はその時とても正当な行いをしたとでもいうように、悪びれたところが少しもなかった。

——あんた、自分の言ってることわかってるの？あの時あんたはわたしのことをレイプした、そうでしょ？

『君はそう思うの？』

すぐに答えとともにノートが返ってきて、わたしは頭の中が混乱した。理一郎がもうこの世の人でないということもショックだったし、だんだん訳がわからなくなってきて、泣きたい気分になってきた。

運ばれてきたコーヒーゼリーは確かに彼の言うとおりの感動的だった。ワイングラスを大きくしたような鉢の中にコーヒーゼリーがあり、その上に薔薇の花の形をしたアイスクリームがのっているのだ。わたしはその白い花びらを一口食べて、それから口元を覆った。そのくらい美味しかったからというわけではなくて——今目の前にいる男が理一郎その人だったらと想像しただけで、泣けてきて仕方なかった。もしそうなら、聞きたいことが山ほどあったのに。

零一郎の友人らしき客の何人かが、こちらの様子をじっと窺うように見ている。それと、コーヒーとコーヒーゼリーを運んでくれたさっきの可愛らしいウェイトレスさんも。もしかしたら彼らはこう思っているのかもしれない。零一郎が軽い気持ちでつきあった女を泣かせていると。

『感情の相違だね。僕はてっきり君が、すべて知っているものとばかり思っていたのに』

わたしが泣きやむのを待ってから、零一郎は静かにそっと、ノートを差し出した。感情の相違？何を言っているのだろう、この男は。わたしたちはあの時まで、お互いに会ったことさえなかったというのに。

——すべて知っているって、どういうこと？

なかなか話の先が見えてこないことに苛々しながら、わたしはあえて短くそう質問した。

対する彼は、時々考えこむようにしながら、

『つまり……僕は兄さんからこう言われたんだ。兄さんが描いた君の肖像画を何点か見せてもらって、もし気に入ったらどうかって。彼女は自分の病気のことも知っているし、了解もとってあるから大丈夫だって、そう誘われてね』

零一郎の律儀な、もやしのような細い字を目で追ううちに、わたしは魂が震えてくるのを感じた。そしてそのあと、何故か不思議と奇妙なおかしみがこみ上げてきた。実際には理一郎の描いた絵ほどわたしは美人じゃなかったから——彼はさぞがっかりしたに違いないと思ったのだ。

『正直に言っていていいわよ。あんたがわたしのことをすぐに思いだせなかったのって、そのせいでしょう？あの時あの部屋は薄暗かったし——人は視覚で受けとったものを脳で修正して見ているっていう話だから、あんたはあたしのことを大幅に脳で修正して記憶の中に収めちゃったのよ』

『そうかもしれないけど……でもやっぱり君は、とてもチャーミングな人だと思う。兄さんが愛した人だけのことはあるよ』

——愛？果たしてあんなものが本当にそうだったのだろうか？わたしは自虐的に微笑みながら、ノートに言葉を書き連ねた。

『ようするに、あんたもあたしも騙されてたってことね。あのインチキ詐欺神父に。もういいわ、わかった。あの時のことはなかったことにしてあげる』

わたしはそこまで書くと、ノートを彼に返し、財布から千円札を一枚とりだしてテーブルの上に置いた。コーヒーが四百円でコーヒーゼリーが六百円だったから、それでちょうどだと思った。席を立とうとすると、客引き係のマナちゃんがちょうど店内へ入ってくるところで、わたしの

ほうに尻尾を振りながら体を擦り寄せてきた。零一郎はその間にドアのほうへ先まわりすると、怒ったような顔をしてノートを指差している。

『なかったことになんかできない！』

その時の彼の顔の表情は、わたしが理一郎の中に見出したいと思って、最後まで見ることの叶わなかったものだった。あんな冷たい微笑ではなく、もっと怒ったような嫉妬に狂った顔をしてくれていたら——野良犬に残飯を与えるように、他の男に自分の体を投げ与えたのだとは、わたしも思わなかつたらうに……。

零一郎は感情が高ぶるとすぐに瞳に涙が滲んでしまう体質らしく、そのどうしていいかわからない必死の形相のようなものを見て、わたしは彼から携帯のメールアドレスを聞き出すことにした。『詳しいことはまたメールで』ノートの最後の行にそう書きこんだ。すると彼はほっとしたような顔をして、「ボクはシゴトにモドルケド」と、別れ際に声にだしてはっきりと言った。「ゼッタイにレンラクしてクレ」

零一郎のその言い方はどこかたどたどしくはあったけど——声色があまりにも理一郎に似ていて、わたしは帰り道で胸を刺し貫かれたかのような、甘い戸惑いを感じ、また一度は忘れてしまいたいと思ったあの瞬間のことを思いだして、体が熱くなるのを感じた。

（そっか。「こんなのいやっ！」とか、「やめて！」とか叫んだわたしの声は、あいつの耳には聞こえてなかったんだ……しかもあの、絶頂に達した時の獣じみた叫び声……あのあともしわたしが気を失うように眠りこんでなかったら、あの兄弟は一体どうするつもりだったのだろうか？）

わたしは最初にメールで、そのことを零一郎に聞いた。ソファの上で目が覚めた時、わたしの体の上にはガウンの他にもう一枚、黄色いタオルケットのようなものがのっていた。そしてまわりに人の気配などは一切せず、鳥の鳴き声だけが窓から響いていたのだ。

『あなた、あれって絶対完璧にやり逃げってやつでしょ？じゃなかったら、どっちか片方が残って事態の説明をしてくれてもよさそうなもんじゃない？』

時刻はその日の午後八時半。わたしは洗い物を片付けながら、ダイニングテーブルの上に携帯を置いて、零一郎からの返事を待った。今日は和久が遅番の日で、閉店までいる友彦さんと一緒に帰ってくるということだったから——今斎藤家にいるのはわたしひとりだけだった。ふたりが帰ってきたら軽く食事できるように支度はしてあるし、あとは屋根裏の自分の部屋にこもって、零一郎からのメールを待つことにしよう。

わたしがそう思って階段を上っていくと、和久の部屋の前あたりで携帯が二度鳴った。零一郎からだった。

『あの時、朝のミサと聖体拝領をすませて戻ってくると、君は消えていたんだ。兄さんは「これでいいんだ」なんて言ってたけど、僕は納得いかなかったから——もう一度きちんとした形で直接会って彼女と話をしたいと言った。そしたら兄さんは、「もしもう一度ユカリがここへきたらね」と言った。でも君はあのあと、あの水車小屋へはこなかったんだ』

わたしは狭い屋根裏の部屋でそのメールを読むと、ベッドの上に倒れこむようにうつぶした。あんなことのあった翌朝に礼拝に出席していただって？あの兄弟はふたりそろって頭がどうかしてるんじゃないかと思った。

『あんたたち、ちょっと頭がどうかしてるんじゃない？はっきり言うけど、あんたたち兄弟がやったことは立派な犯罪よ。それなのにまあ、その翌朝にはけろっと「神よ、憐れみたまえ」なんて言って祈ってたっていうの？信じられないわね、まったく』

『仕方がないよ。三つ子の魂百までっていうやつで、呪われてるんだから……パブロフの犬と一緒に、条件反射みたいなものなんだ。そんなことより、もっと大切な話をしよう。兄さんが死ぬ何日か前に、僕に言っていたことがあるんだ。もしこれから先偶然どこかでユカリと出会ったら——その時まで彼女が独身で、誰のものでもなかったら結婚するようになって、そう言われたんだ』

やっぱりこの兄弟、ちょっと頭がおかしいというか、どうかしてるとわたしはメールを読みながら思った。それで、茶化してやるつもりで『あんた、わたしと結婚する気なんてあんの？』と書いて返信してやった。そういえば理一郎も零一郎と似たようなことを言っていたっけ……神の祝福は呪いと表裏一体だとかなんとか。

『もちろん、ある。ユカリがどのくらい兄さんの能力について知っていたか、僕にはわからないけど——兄さんは預言者で、時々未来を言い当てることさえあったから、僕は兄さんの遺言に聞き従わなければ、呪いを自分の身に招くことになると思う』

『ねえ、その呪いって何よ。ちょっと大袈裟なんじゃない？たぶん理一郎は良心の呵責か何かから、死ぬ前にそんなことをあんたに口走っただけよ。そんな預言なんて信じてないで、わたしよりももっと可愛い女の子と結婚したら？』

——今日、喫茶店で会ったあのウェイトレスの女の子みたいな、と書きかけてやめた。これは女としての直感だけど、なんとなく彼女は零一郎に気があるのではないかと、そんな気がしたのだ。

『兄さんは医者からずっと手術を勧められていたんだけど、先に見える人だから自分の寿命についてもたぶんわかってたんだと思う。僕はユカリと一度関係を持ってから、休みの日には必ず兄さんのアトリエへ遊びにいった……もしかしたら君がきているかもしれないと思ったから。そしてあのあと一か月もしないうちに——ユカリを描いた絵の前で冷たくなって死んでいる兄さんの遺体をブラザーのひとりが発見したんだ。兄さんの死に顔はとても安らかなものだった。もう何も思い残すことはないって、そう言っているみたいだったよ』

わたしはそのあと暫くの間、枕に顔を伏せて泣きじゃくった。わたしは実際には理一郎が死んでしまっただけで——彼はまだ生きてると信じきっていたのだ。今からもう八か月以上も前に彼は亡くなっていたなんて……突然わたしは自分も理一郎と一緒に死ぬべきだったのではないかとそんな気がして、誰に遠慮するでもなく大声を張り上げて号泣した。

『あんまり突然でびっくりするかもしれないけど』と、一時間くらいしてから、零一郎から再びメールがきた。『僕はユカリと結婚したいと思う。もちろん僕には耳が聞こえないというハンディがあるし、その上安月給でお金もなければ、頼れる身内もひとりもない……でもユカリのほうで頭の隅のほうにそのことをちょっと覚えてほしいんだ。もし仮に今ユカリに好きな人がいたりつきあっている人がいたとしても、最後には結局、兄さんが言っていたとおりになると思うから』

わたしはそのあと、零一郎に何も返事をしなかった。わたしだって、頼れる叔父と従兄がいな

ければ、零一郎と似たようなものだった。彼がもし肉体の孤児であったとしたら、わたしは精神の孤児のようなものだったから……そしてふと思いついた。精神の孤児と肉体の孤児が結ばれたとしたら、一体どうなるのだろう、と。

その後、わたしと零一郎は本当に、結婚することになった。あれから何度かデートを重ねるうちに——綾香ではないけれど、デートして三度目くらいにはこう思った。たぶん、わたしはこの男と結婚すると。

手話の勉強は大変といえば大変だったけど、そうでもないといえばそうでもなかった。何故といえば、うまく説明するのは難しかったけど——ようするに、わたしも零一郎も、精神感応能力のようなものがもともと強い人間同士だったからだ。もちろんこれはお互いに考えていることがなんでもわかるということではなく、その傾向の強い人間同士だったから、彼はわたしの口の動きをすぐにはっきり読めるようになったし、わたしは彼が手を動かす前から何を言いたいのかわかっていることのほうが多かったというわけだ。

とはいえ、自分の夫がどんな人かと誰かに訊ねられたとしたら「さあ、よくわかんないな」とわたしは答えるだろう。何しろ彼は夜、ベッドの前で膝をついて祈ってから妻とコトに及び、そして朝はまたベッドの前で膝をついて祈ってからその日一日をはじめるという、そんな人だったから。そして何故祈るのかと聞くと決まって「呪われているからだ」と答えるのだ。

わたしと零一郎は籍だけ入れて、一緒に斎藤家で暮らすことになったのだけれど、新しく夫婦の寝室となった屋根裏部屋で、初めての夜を過ごそうという時——おもむろに祈りはじめた彼に向かってわたしはこう聞いた。

「理一郎も何度か似たようなことを言ってたけど……あんたたち兄弟がいう呪いって一体なに？ 理一郎は自分の呪いが子供に遺伝するのが怖いとか言ってたけど、零一郎もそんなふうに思ってるの？」

「さあ」と両方の手の平を上にあげてから、零一郎は手話で言った。「僕には兄さんのような能力はまるでないからね。それでもまあ、兄さんの言いたかったことはわかるような気がするな。兄さんと僕はよく言ったものだよ。僕たちが双子ではなくひとりの人間として生まれていたら、兄さんは心臓が丈夫で、僕も耳がきちんと聞こえていたに違いないってね。僕と兄さんは同じ肉と骨をもった、もともとはひとりの人間なんだよ」

「それ、答えになってないんだけど」

ベッドの中にもぐりこんできた夫は、湯たんぽに冷たい足をのせながら、低い天井に向かって話しかけるように、空中で両手を動かしている。時々、わたしの様子を窺うようにちらと視線を送りながら。

「つまりね、それが僕たち兄弟の呪われた運命のはじまりだったんだ。ひとりの人間として生まれなかったということがね。もちろん、それ以外にもあるけど……僕が祈るのは何も、そうしなければ死んだあとに天国へいけないとか、死んだあと地獄へ落ちるからとか、そんなことのためではないんだ。もうそういう習慣になってしまってるんだね。幼い頃からそうしつけられてきたから。今じゃあというか今でもというか、祈らないと何かよくない悪いことが起きるんじゃないかって、怯えるようにさえなってる。たとえば、朝祈らないで仕事へ行って、何かヘマをやらかしたとする。そしたらすぐにこう思うんだ……ああ、朝祈らなかったから神さまが罰を当てたんだ、なんてね」

「じゃあ、理一郎の言ったとおりにわたしと結婚しなかったら呪われるっていうのも、そういうこと？」

わたしはナイトスタンドの明かりの下で、空中に手の言葉を描いた。

「それはね、またちょっと別なんだ」夫は羽毛布団の上に一度両手をぱたりとおくと、少し考えてから、再び薄暗がりの中に言葉を刻んだ。「喫茶店『マナ』のウェイトレスの女の子のこと、覚えてる？」

「覚えてるわよ。ええと……草壁なゆこさんだっけ？」

「うん、そう」と、彼はわたしのほうを振り向いて頷いた。「ユカリとホテルのロビーで偶然会って、『マナ』で話をしたあと——一か月くらいしてからかな。彼女に言われたんだ。「あなたのことが好きです」って」

「それで、どうしたの？」興奮のあまり思わずわたしは、ベッドの上に半分体を起こしかけていた。

「ちゃんと言ったよ。僕はユカリのことが好きなんだって」零一郎はわたしの嫉妬を面白がるみたいに、優しく微笑している。「でも同時にこうも思ったんだ。『ああ、早速誘惑がきたな』って。なゆは可愛いし性格も素直だし、とてもいい子だから男としてちょっと惜しいなと思う気持ちも正直少しだけあった。だけど兄さんの言葉があったから、僕ははっきりユカリのを選ぶことができたんだ」

「ブスで性格ひねくれ曲がってて、悪うございましたね」

わたしは草壁さんが結婚祝いにくれた、うさぎが二匹結婚式を挙げている手作りの人形のことを思って心中複雑なものを感じた。よりもよって新婚初夜にこんな気持ちにさせられるだなんて。

「つまり、僕が言いたいのはね、こういうこと」零一郎はわたしの不安気な眼差しに気づくと、わたしの頬を軽く撫でてから言った。「僕がなゆとつきあっていても、おそらくはうまくいかなかっただろう。でも純粋で綺麗な子だから、ちょっと手をだして汚したいなっていう誘惑の気持ちを退けるのはなかなか難しい。大袈裟にいうと、これは旧約聖書の預言者たちの言葉の型みたいなものなんだ。預言者たちは時の王に神の言葉を告げるけど、大抵の場合ほとんどの王は真実の神の言葉を信じず、偶像の神の言うことに聞き従ったり、あるいは王としての自分の考えを神の言葉よりも上のものとして行動した……その結果、国は衰退したり没落したりしたというわけだね。僕があの時なゆのことを受け入れていたら——僕は今こうしてユカリと幸せに寝床をとにもするでもなく、かといってなゆともうまくゆかず、迷える羊のように寂しい心の荒野をさまよっていたことだろう」

「んー……なんかよくわかんないけど、ようするに理一郎の言った言葉は絶対当たるっていうことなのね？」

「そういうこと」彼は再び手を休ませるように、掛け布団の上へぱたりと両方とも置いた。そして人が話す時に呼吸を整えるのと同じく、少し間を置いてから言葉を紡いだ。「こういう言葉の灯台が人生にあるのとないのとは大違いだと思う。でもね——常に神の言葉が第一で、自分の好きなように、したいようにできないというのは、人間にしてみれば一種の呪いのようなものな

んだ。おそらく兄さんはそのことで、相当悩んだと思う。兄さん自身も自分のそれを<魂の懊悩>と呼んでいたけどね」

「魂の懊悩？」

わたしは部屋の隅にあるイーゼルにかかった、理一郎畢生の作を眺めた。それは彼が亡くなる間に完成させた絵で、裸の女が斜め後ろにある鏡を振り返って自分の月型をした赤い痣を見ようとしているというものだった。

鏡に映る女の表情はぼやけていてはっきりとはわからない。絵の中に登場するのは、際どいポーズで体をひねっている女と女を映す鏡、それと花瓶に活けられた真っ白なジューンリリィと鮮やかなオレンジ色のタイガーリリィ、大きなサンスベリアの鉢植えにピンク色の花が咲いたサボテン、一匹の猫……灰色の室内には一箇所だけ窓があり、そこからは空と海の境が見えた。

それは確かにわたしだった。極度に美化されているわけでもなく、胸の大きさも体の線も肌のくすんだような色も何もかも、すべてが現実のわたしという存在を表していた。わたしはこの絵を見た時、すぐにひとつの物語を読み解いた——女はコンプレックスに悩んで体をひねって鏡を見ており、鏡に映る赤い三日月の痣はその象徴なのだ。茎の交差した白い花と赤に近いオレンジ色のユリは純潔と貞潔を表し、窓辺に眠る猫は男にはわからない女という生き物の魔性的な部分を表現している。大きなサンスベリアの鉢はわたしがどっしりとしたしっかり者であるのと同時に、すすくく伸びた葉は理一郎がわたしのことを「いい人間だ」と感じた真っすぐな伸びやかさのようなものを表現しているのではないだろうか。ピンク色の花が咲いたサボテンはわたしのアイロニカルな性格とユーモアセンスを表していて——窓の外、海と空の境目からは風が吹いているように感じられる。もちろん風は目に見えないものだけれど、全体的な構図として、その方角から間もなく何かやってきそうな予感を、この灰色の部屋は見る者に感じさせるのだ。

（そして）とわたしは思う。（そしてわたしはやがて訪れるであろう人間の男のひとり（理一郎）に白い百合の花を、もうひとりの男（零一郎）にはオレンジ色の鬼百合を渡すだろう）

わたしは理一郎のアトリエで零一郎に抱かれて以来、そのあと肉体的な交渉を一度も彼とは持たなかった。べつにわたしが結婚するまでそれを拒んだというわけではなく——お互い、暗黙の了解のうちに婚前交渉を自然と避けることになったのだ。だからつきあっている半年の間にしたのは、数回のキスだけだった。

新婚初夜のその夜、零一郎はキスをしはじめる前に「僕のことを兄さんだと思っていい」と言った。そう——わたしは彼からプロポーズされた時、「もしかしたら自分は理一郎の代わりとして零一郎のことが好きなのかもしれない」と正直に言ったのだ。「それでもいいの？」と。そうしたら彼は「なんだそんなことか」というように肩を竦めて「僕と兄さんは同じ魂と肉を持ったもともとはひとりの人間だから、結局は同じことだ」と答えたのだった。

最初、わたしにとって理一郎と零一郎のふたりは、まったくべつの異なる人間であるように思っていた。ふたりとも、性格に似通ったところはたくさんあるけれど、お互いが持つ個性や存在感の放つ光のようなものに、決定的な違いがあった。わたしにとって理一郎は孤高の人であるように感じられたのに対して、零一郎はすぐに誰とでも仲良くしたがる傾向が強く、実際のところ本当に、彼は手話の通じない健聴者が相手でも不思議と心を通いあわせるのがうまかった。その他寂しがり屋で甘えたがりなところも、理一郎とはあまり似ていないように感じたし、一番似て

いるところといえば、本質的な事柄——ようするに魂のこと——について語る時、わたしにはよく理解できないことをえんえんと語るということだったかもしれない。

でも零一郎が自分と理一郎のことを「同じ骨からの骨、肉からの肉」と表現したように、確かに彼に抱かれていると、わたしはいつも理一郎にそれをされていると感じた。どうしてなのかはよくわからない。いくら現実的な肉体を持つ自分の夫のことに精神や意識といったものを集中させようとしても、理一郎の存在が絶対的な権威をもってわたしにそれを許さないのだった。

このことはもちろん何も、わたしが零一郎のことを理一郎のかわりに愛しているということを単純に意味しはしない。わたしはふたりのうち、どちらのことも愛していた。でもふたりの人間を同じくらいの強さで同時に愛しているというより、それはひとりの人間をたとえようもなく愛しているという感覚に近かった。そして零一郎が絶頂に達する時にいつも上げる、獣のような叫び声——その哀切な叫び声の中にわたしはいつも、理一郎の魂にもっとも近い何ものかを感じるのだった。

結婚してから一年後、わたしは身籠もって双子の赤ちゃんを生んだ。上が男の子で理一郎、下の子が女の子で真亜子という。正直、産婦人科で医師から「双子のお子さんですね」と告げられた時、わたしは「うぼげえ！」と思った。何が「うぼげえ！」なのかというと、わたしと零一郎は常に金欠状態のだ貧乏カップルだったので、双子なんて出産した日にはあんた……とわたしは誰にともなく語りかけたくなっただけだった。

夫、零一郎の客室係としての給与は本当に安く、わたしが産休をとっている間は本屋の給料も入らないとなると……もし斎藤家に居候させてもらっていなかったとしたら、黛家の明日は一体どっちに？というような、そんな財政状況だったに違いない。

従兄の和久は情報処理の専門学校を卒業後、市内でひとり暮らしするようになっていたので——一応念のために言っておくと、これは新婚カップルのわたしたちが彼のことを家に居ずらくさせたとか、そんなことではまったくない——友彦さんはできればこれからもずっと、同じ屋根の下で暮らしてくれると嬉しいといつも言っていた。

実際、理一郎も真亜子も友彦さんのことを実のおじいちゃんと思って少しも疑ってなどいなかっただろう。わたしたちは本当に本物の家族みたいだった。最初、零一郎はわたしにもほんの時々しか、声にだして話してはくれなかったけれど、今では家にいる時は手よりも口を動かしていることのほうが多いくらいだ。そうしないとまだ六つの子供には意味が通じないことがほとんどだったから。

この間、ちょっと聞く機会があって夫にこう質問してみた。「結婚してよかったことは？」と。

「うーん……煙草をやめられたこと、それから自分を根なし草のように感じなくなったことかな」

「逆に、悪かったことは？」

「特にない。幸せだよ」

零一郎はアニバーサリーマニアだったので、結婚記念日やわたしの誕生日には必ず、作文を書いてくれる。「僕はユカリと結婚できてとても幸せです。何故かというと、ユカリは料理がうまくてやり繰り上手でベッドのテクも最高だから」というような。また子供たちにも誕生日には必ず、どんなに自分が理一郎や真亜子のことを愛しているかということ伝えるために、バースデーカードを贈る。もちろん友彦さんにも折々に感謝の気持ちをこめたメッセージカードを書いていて、時には涙もろい彼を泣かせることさえあった。

彼はいい夫であり、子供たちのいい父親でもあったけれど——もちろんわたしたちだって普通の夫婦と同じく時々喧嘩することくらいはある。そして勝者は常にわたしだった。わたしはいつも最後には夫の顔をピシャピシャはたいて彼のことを涙目にさせ、夫婦喧嘩の勝利を得るのだった。

そんな感じで、今やわたしもすっかり肝っ玉母さんになってしまった。朝の五時にまだ眠い体に喝を入れるようにして目覚め、ごはんを作ってお弁当におかずを詰める。子供たちがTVを見ながらぼやっとなごはんを食べているのをせかし、夫と子供、友彦さんを送りだしたあとは掃除に

洗濯……わたしはまだ二十八歳といえまだ二十八歳だったけど、実際の年齢よりも老けてみえる顔立ちをしていたし、服装や化粧などもあまり構いつけないので、かなりのところ所帯じみたおばさんっぽいオーラを放っていた。

それでも——理一郎の残した自分の絵を見るたびにわたしは思う。あの中にはまだ十九歳の頃の、処女であるわたしがいる。現実の肉体を持つ人間であるわたしは年を追うごとに老い、色気も何もないおばさんと化していくけれど……あの中には永遠がある。そしてわたしもいつか、理一郎がいるのと同じ魂の世界へいくことができるだろう。そこでわたしは天国の建物の壁画を制作している理一郎に会い、こう訊ねてみたいと思っている。

「あなたがわたしの中から連れだした、永遠の乙女の絵はどこですか？」と。

終わり

ヴァージニティ

<http://p.booklog.jp/book/29705>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29705>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29705>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.